
最強の俺と最弱の少女が魔法学園で同居生活（仮）

落果聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の俺と最弱の少女が魔法学園で同居生活（仮）

【Nコード】

N8195Z

【作者名】

落果聖

【あらすじ】

二人がかりで一つの魔法を唱える現代。炎を使う魔法使いの名家の生まれである火野昇は、天才魔法使いであるが炎の魔法を一切使うことが出来なかった。そんな昇は自らの野望を叶えるために魔法高校に入学した。魔法高校では二人一組で魔法を学ぶのが基本であり、一緒に学ぶ相手の実力が学校生活を大きく左右してしまう。しかし残念な事に昇のパートナーは炎の魔法しか使えない補欠合格のド素人である倉守美海になってしまった。そんな二人が一つ屋根の下に暮らし、助け合いながら自らの望みを叶えるために戦う現代

学園ファンタジー ダブルヒロイン、チート主人公になる予定ではあるけど予定は予定で未定だったりします。タイトル変更さらにタイトル募集中

プロローグ

魔法高校、正式名称は魔法特区大学附属高校には毎年三万人近くが入学する。

なぜそんなにも入学希望者がいるのかと言えば、この場所では地位も名誉も金も望むのならば全てを手に入れることが出来るからだ。二十歳未満で所得が一億円を超えていることも珍しくないし、卒業後政治家として活動している人もいる。

そこまでいかなくとも、魔法高校と大学併せて七年間を過ごしほほどの成績で卒業できたのならば、一流企業へ簡単に就職することも出来る。

これが学校の光の部分。

光が有る場所には必ず闇ができる。

魔法高校が発表しているデータでは毎年数千名にも及ぶ死傷者が出ている。名目上は事故として処理されているが、実際は魔法使い同士の決闘によって死んだり怪我をした数だ。

魔法使い同士の決闘では、ミンチになった肉片が残っていればマシな方で、死体そのものが消失していることも珍しくない。

対照的に過失致死罪での逮捕者はほとんど居ない。これは魔法高校が事実上殺人を容認しているからだ。

だからといって魔法高校が生徒の死を望んでいるわけではない。

魔法高校では入学希望者に対して事前にこれらの事をきちんと説明している。

それでもなお、若者達はそれぞれの野望を、希望を抱いてこの学校に入学してくる。

出会い編 1

一瞬の静寂の後拍手が湧き上がった。最低の気分だ。

まず闘技場を始業式に使うって言う発想が最悪だ。毎年この闘技場だけで死人が100人は出てるぜ？ そんな場所で祝いの門出が――なんて語るのは馬鹿らしい。

そんな物よりも俺が欲しいのは歓声だ。煮えたぎる興奮が頂点に達した時に心の奥底から湧き上がってくるような奴。それこそが勝者に対しての報酬と言う物であるべきだろ？ まあ、新人生代表の挨拶であることを考えれば入試一位で突破した者への報酬と考えられるけど、大半の人間にとっては常識だからやってるだけにすぎない。

挨拶を終えて壇上から降りる頃には闘技場内に広がるのが拍手から話し声に変わっていた。一人二人ならいざ知らず、この騒音に参加しているのは会場内にいる新入生約30000人で、自分の声を相手に伝える為にさらにわめき散らすものだから收拾がつきそうもない。

うるさいって思うけど、だからといって騒いでもう気持ちも解る。これからこの学園入学式における最大のイベントが待っているのだから。

席に戻ると俺の相棒である氷河樹里が隣の席で待っていた。

氷河樹里とは五歳の時から和声魔法と一緒に使う相手である和音として付き合ってきた。おかげで異性としての認識は全くない。

「ノボルかつこよかった。」

樹里は俺にそう語りかけながら手のひらサイズの袋を俺に手渡した。この袋がイベントの主役だ。

「何言ってるんだよ。俺は何時だってカッコいい」

「たまには褒めてあげようかと思って言ったらこれだもん。可愛く

ないな」

へえ、樹里はそんな事を言うのか？

ならば意趣返し。

「……樹里の髪の毛綺麗だよな」

意趣返しではあるけれど、心にもない台詞かと言えばそうでもない。

「髪は乙女の命だから綺麗にしてて当然だもん」

樹里はそっぽを向いてしまう。

髪は乙女の命と口癖のように言うだけあって、樹里の髪の毛はかなり綺麗だ。胸元まで真っ直ぐ伸びた髪で、風にいつも弄ばれている。色は銀とも青ともつかない色で、光の反射で幾重もの姿を見せる。

もつとも、髪色と言う点について言えば、氷河の一族はみんな同じような髪色だ。魔力が関係してるとはいけど、詳しくは知らない。さすが魔法使いの名家と言いたい所だけど、他の名家にそんな特色は存在せず、たまに全然違う髪色の子供が生まれたりするぐらいだ。少なくとも火野昇^{ひののぼる}、つまり俺は黒髪だし、火野の一族もほとんどが黒髪だ。

俺は樹里の顔を手でもって自分の方へ向けた。

樹里の顔は紅く染まっている。

そして何より、そんな顔を見せたくないのか必死になって反対へ向こうとするから可愛い顔が台無しだった。つぶれて変顔である。

さてこの顔は一体どこまで変顔になれるのだろうか？ と俺が趣旨を大幅に間違えようとした時に闘技場からざわめきが消えた。

壇上には樹里の叔父である氷河氷柱^{ひょうが びゅうが}が立っていた。

前に何度か会ったことがあるけれど、あまり相手にしたい相手では無い。快楽主義者を自称して、その場その場の刹那的な生き方をしている。そんなわけで俺も樹里も何度か迷惑を被った事がある。

「君たちの学年を担当する氷河氷柱です。まあボクの事なんてどうせイヤでも覚えるので、さっそく本題。」

さきほど君たちに配られた袋には指輪、鍵、寮の住所と部屋番号が書かれた紙の三つが入っているはずだ。……もしも無かつたら後で職員棟に来なさい。

それでだ。指輪を取り出して中指に付けて貰いたい。

この学校で初めて魔法を学ぶ物も少数いるので説明しておく、この指輪は結合指輪リンクリングと呼ばれる物で、二つ一組の指輪だ。この指輪を使い二人一組で使う魔法、和声魔法ハーモニーが君たちの学ぶ魔法だ。

なぜ二つ一組なのに君たちの手元に一つしか無いのかと言えば、もう一つは君たちがこの学校で和声魔法ハーモニーを使う時のもう一人の相手である和音コードの手に渡っているからだ。和音の相手に不安があるかも知れないが、入試の時に相性も調べてあるので、魔法が使えないなんてことはまず無いので安心して欲しい。

この指輪は魔法を使うだけでなく、もう片方の指輪をはめている人物と通話することが出来る。それで通話して友情を深めて貰いたい。

相手の声は頭の中で響く、自分の声を伝えたいときは口で喋るのではなくて、強く思えば伝わる。逆に言えば言いたくなくても伝わってしまうこともあるので、慣れない内は気をつけるように。以上これをもって入学式は閉会。」

そう言うとき氷柱は逃げるように壇上から降りた。

俺の時とそう変わらない拍手が舞った後についてみんなのお楽しみタイムである和音発表の瞬間だ。

和音は席替え、いや、クラス替えなんかよりもよほど重要だ。和声魔法ハーモニーを一緒に使う相手を変えることはほとんど無い。相性によっては全然使えない可能性もあるし、同じ相手としての方が魔法の扱いが容易になるからだ。

逆に言ってしまうと、そう言う相手がすでにいると、まず相手が変わるような事が無い。長期間同一の和音だと、お互いの魔力の波長が似通ってくるのだ。

つまりだ。十一年間も和音である樹里を超えるような相手なんて

まず表れる訳が無い。見知った顔に安堵することはあっても驚きやとまどい興奮なんて物とは無縁だ。

そう言うわけで、俺にとってはこのイベント、特に楽しいところが無かった。通話の必要性が全く無い距離だぜ？ 友情を深める必要なんて今さら無い。

俺は袋から指輪を取り出すと、早速指に付けることにした。と思つたら樹里に止められた。

「もう一人で付けないでよ。いつせいのっせ、で一緒に指輪をつけようよ」

「はいはい」

まあ樹里が相手なら特に問題も無い。人見知りと言うわけでも無いが、これから寮生活が始まる時に友人が居ると言うのは非常にありがたいものだ。

「いつせいのっせ！」

樹里のかけ声と共に俺と樹里は指輪をはめた。と言うか何でお前は左手薬指にはめる？どの指でも、と言うか足の指でも問題は無いけど、そこは別の意味で問題があるだろ？

指輪をつけて十秒もしたけれど、頭の中で特に言葉が響く様子は無かった。樹里が目を細めてにらみつけてくる。メガネでも忘れてきたようにしか見えない。

「ノボルなんか反応してよ」

「お前こそ何か言えよ」

「わたし言ってるよ！」

「俺も言ってるぜ」

てすとてすとてすと。と面白さの欠片も無いつまらない文章をね。故障？叩けば治る？」

「電化製品は叩いたって直らないし、クソガキだつて叩いて直る事の方が少ない。ましてや繊細な魔法道具である結合指輪アーティファクト
リンクリングが直るわけ

無——」

俺が言葉を続けようとしていると、樹里の顔色が変わった。おぞましい何かを見たような顔で、樹里が迷子になった時同じような顔をしていたのを思い出させた。

「ねえ……ちよつと言いにくい事いいかな？」

「じゃあ結合指輪リンクリングを使って話してくれ。それなら聞かれない」

「もう！そうじゃないの！ あかね。どうやら別の人が和音コードみたいな」

俺の頭は理解を拒絶した。

「俺よりも相性が良いと言うことはかなり強いって事でもあるし、むしろ良い事だろ？」

一般的に和音コードは自分と同じ程度の実力であることが望ましいとされる。和音コードを決めるのに使われるワグナー方式の判別法では実力の部分も加味されている。つまり、樹里の和音コードは俺ともほぼ同等の実力を持ちつつもさらに俺よりも樹里との相性が良い相手であると言うことだ。

「でも、わたし、ノボルが良かった」

樹里は本気でへこんでいた。

「俺も樹里相手が良かったが、決まった以上しょうがない。」

俺は樹里の頭を撫でる。何時撫でても撫で心地は満点だ。

「こんなところでへこんでると和音コードに失礼だ。いつもの笑顔に戻って出迎えてやれよ」

「う、うん。じゃあ向こうから場所の指定されたから行ってくるね。また後で、連絡してね、絶対だよ。そしたらお互いに和音コードを紹介しようね」

樹里は俺に向かって手を振りながら人混みに紛れていく。名残惜しそつにこっちを見続けるものだから樹里は他の人に当たってしまった。

俺が見て無くても大丈夫なのか少々不安だが、俺が付き添う訳にもいかないしな。俺にも和音^{コード}が待つてることだろうし。

向こうが連絡してくるまで待つしか無い。

俺は携帯ゲーム機を取り出して、時間を潰すことにした。

遅い。あんまりにも遅い。カップラーメンなら三つ出来るぜ？

二分で食べる俺なら五個は食べ始めてるぜ？ 本当に故障か？

（ごめん待った？ あんた名前は？）

妙に癖のある女の声だ。

（何で遅れたんだよ？）

（そこって普通ボクも今指輪はめた所なんだよって返す場所じゃないの？）

（俺は女に特別優しい訳じゃない。それに待ち合わせじゃなくて、指輪をはめるだけに遅れる訳ないだろ普通）

（せっかく花もたせてあげよってのに、つまらない奴）

そんなくだらない花なんかいるかよ。

（んで、何で遅れたんだよ）

（………… キンチョーしてた）

響く声に照れくささが見え隠れしていた。まあこれから和音^{コード}としてやっていく相手だ。お説教もこれぐらいにしておくべきだろう。

（どんな人かなって思ってたけど、キンチョーして損した）

もつと色々言っておくべきだったと後悔した

（俺は火野昇、君は？）

^{くらもり}
（倉守美海^{みみ}）

（よろしくな倉守）

出会い編2

ぐだぐだと指輪越しで会話するのもあれなので、俺たちは場所を指定して落ち合うことになった。

他の生徒達もまあ似たような物で、あえて分類したとしても、学生寮の方まで行くか（基本的に和音の部屋は隣になつてゐる。^{コート}）か、そこら辺のファーストフード、ファミレスにでも入るかのも二択だ。

俺は人混みが嫌いだし倉守も人混みが嫌いだったので、闘技場から一駅離れた大学研究棟駅のホームになった。

学園の敷地内には電車が走っている。学園の敷地を縦に一本横に一本周りをぐるりと囲むように一本存在してる。

学校ごときに何で鉄道までしかれていのかと言えば、正確に言うところの学校は学校ではなくて魔法特区に指定された特別な場所だからだ。その魔法特区の中に教育施設が分散して配置されていると言った方がより正しいが、世間一般では魔法大学と一纏めにされている。

この学校が殺人を実質容認しているのもこの魔法特区制度が主な原因だ。

日本が魔法産業を主軸にする国家戦略を打ち出して三十年。その甲斐あつてか現在の日本は魔法技術に関して他の先進国よりも十年ほど先と言われている。

そう言うわけで、この学園の敷地というか、魔法特区には様々な企業があり、様々な魔法の実験が行われ、富、名誉、地位を求める人が集まり、命がゲーム感覚で消えている。

電車に数分ほど揺られていると大学研究棟駅についた。

学生寮がある方面とは反対側にあるので、先ほどの人混みは夢か幻かと聞きたくなるほど人が全然居なかった。

駅にいるのはスーツを着たおじさんとか、白衣のままスーパーの

袋をぶらさげている姉さんとかで、少なくとも俺の和音^{コード}と言えるような人じゃない。

俺はちよろちよろっと辺りを見回すけれど、やはりそれらしい人はいないし、指輪で話しかけても反応が無かった。大半の人間にとつて指輪による通話は思考が漏れ出ているのほとんど一緒なので、用が無ければまずしない。

つまり、また待つのか……これなら携帯電話の番号ぐらい聞いておけば良かった。魔法特区内なら電車内での通話も合法だしね。

ベンチに座り十分ほど待っているとようやく次の電車が来た。扉の開く音と共に俺はその中に少女がいるかどうか探すためにきょろりと見回す。

はずだったのだが、そんな必要もなく、目の前にああ絶対こいつだ。と確信させる少女が目の前に立っていた。

初めて見たときの感想を言わせて貰うのなら、最悪だった。

まず身長が低くて、手足が細い。これが女の好みについての感想だったならば、まあ悪くない。と軽く返せたかも知れないけれど、魔法使いとしては致命的だ。

魔法使いは肉弾戦もこなすので、出来れば高身長の方が良い。

真っ赤な髪をツインテールにしており、つり目で真っ赤なアンダーフレームの眼鏡をかけており俺のことをまっすぐ見据えている。唇は上に曲がり、さてこれからどんな悪戯をしようと悩んでいるようにも見えた。

眼鏡をかけているのも魔法使いとしてはマイナス要素だ。コンタクトレンズに後で強制的に変えさせよう。

俺が値踏みをしているように倉守も値踏みをしているのだろう。電車がホームから立ち去ると美海は口を開いた。

「ごめん待った？」

何、ふざけた事をいつているんだ？ 大体同じような時刻に闘技場から出て、同じ駅で電車に乗ったはずなのに何故遅れる。

文句の一つでもぶちまけてやるうかと思っただ、俺は別の台詞にした。

「いや今来た所だ」

今後の事を考えれば対立する意味なんて無い。そう言うわけで俺は美海の言うところの花を持たせて貰うことにした。

「どう考えても一本先のに乗ってきてる」

どうやら美海は花より団子らしい。

「さっきお前が今来たところって言うシチュエーションって言ったからわざわざ言ったのにこれかよ」

「あんなあたしが適当に言った言い訳信じてたの？」

「次から絶対に信じない事に決めた！」

魔法の相性とかどうでも良いから樹里と組ませて欲しいと心の底から願いだめた。

「んで、倉守は何の属性が使えるんだ？ あとどれぐらいの腕前なんだ？ 知らなくて悪いと思うが倉守ってどんな家なんだ？」

「いっぺんに言うな！ ええと、試験の時に調べたのだと炎だけだった。魔法はこの学校に入って初めて学ぶ。最後の質問は意味がわかんない」

俺はその答えが訳解らん。

まず人間は体内に属性比率と言う物がある。例えば樹里ならば水が四割風が三割で他の三割が他の基本属性全てで構成されている。この属性比率が使える魔法の優無や得意不得意を左右する先天的な要素となる。この属性比率内に存在しない属性はどうやっても唱えることが出来ない。ワグナー方式では100%を切ってしまう属性を正確に判断することは出来ないの、美海の具体的な属性比率は解らないけれど、炎が八割で他の二、三属性で二割と言うのが妥当な所だろう。

魔法の基本属性は九種類とされており、一般的な人間で約五種類

使えて。名家の出身だと全て使えることが多い。

ワグナー方式だとこの使える属性の数も考慮に入るはずなのだが……

「どうした？ あたしの美貌に惚れたか？」

「まな板を通り越して洗濯板のお前が何を言ってる？」

「何を！？」

あ、でもよく見たらふくらんでいるようにも——服の皺だった。
「それより少し用事を思い出した」

倉守はぎゃーぎゃーと何か叫んでいたけど俺は無視して職員棟に向かった。名家の中でも五本の指に入る火野の出身で、基本属性を八種類使え、さらに禁忌属性である時の属性まで使え、五歳の頃から英才教育されてきた俺が、ド素人と組むなんてあり得るはずがない。

リンクリング
結合指輪に故障が無いとするなら、学校の方に問題があったに違いない。そう思って俺は直訴しに来たのだ。

俺は倉守を置いて職員棟に入ると、俺は知ってる顔を見つけた。

「おじさんちよつと話があるけどいいか？」

「ここでは樹里のおじさんじゃなくて、氷柱先生と呼んで欲しいな」
「わかったよおじさん。それで、俺の和音コードが間違ってるけどどういう事だ？」 おじさんは突然笑い始めた。あまり品の無い笑い方だけど、誰もおじさんの方を見ようとはしない。たぶん聞き飽きてるんだろう。

「ああ。そっぴやそうだったな。すっかり忘れていたよ。

確かに昇が間違っていると思いたいのも解るよ。確かにボクも昇と倉守さんの判定結果には驚いたし、間違いだろうと思って再検査もした。しかし間違いはなかった。一年生の中で君と一番相性がいいのは倉守美海だ。

この結果は職員達の合間でも話題になったよ。

火野の中でも歴代最強クラスの素質を持つ入試一位の魔法使いと、
どこの馬の骨かも解らない補欠入学で入ってきた一般人がタッグ
を組む。

学園始まって以来の最強と最弱のコンビ。

こんな面白いことはボクでなくて面白がるだろうね」

「もう一度再検査をしてください！」

「一度どころか三回ほどしたよ。倉守さんの詳細なデータは無かつたけれど、君の正確な判別データを火野に提出させた。その結果解ったことと言えば、他の組み合わせに間違いを見つけたぐらいだ。これ以上の検査はしないし、組み合わせの変更も無い」

頭が真っ白になった。

「ボクとしてはだね。最強と最弱のコンビと言うよりは火野であるのに、火が使えない少年と、火しか使えない少女のコンビであると言う方が面白いと思うがね。」

二人で>>地獄の業火<<と名乗るのがベストと思うが、どうかね>>地獄の業<<君？」

>>地獄の業<<つて一言で俺は思考を取り戻した。

俺を蔑むための二つ名。

火野の中でも歴代最強の炎使いと称された俺の父である火野彰は>>地獄の業火<<と二つ名で呼ばれていた。

そんな父を持つにもかかわらず俺は火が一切使えない。だから地獄の業火から火をとって地獄の業。

お前の業は火が使えないことだとも言うような。そんな二つ名まあだからといってこの快樂主義のおじさんが、わざわざ俺を蔑む理由も無いだろう。

条件反射で俺が反応してしまっただけで、おじさんとしてはただ単に言葉遊びとして楽しいから使ったぐらいだ。

何度も快樂に付き合わされた身としてはこれぐらいで怒る気にはなれない。

「わかりました。ありがとうございます」

「倉守さんの今後の成長に期待しなさい」

俺を超えてしまうような爆発的な成長をされたらされたで、俺の今までは何だったのかと疑いたくなるので遠慮して貰いたい。

「そうだそうだ。昇君。後で君はボクに連絡してくるだろう。だから携帯の番号を教えておこう」

こつやつて能弁に語るとき、それは不幸の予兆だと今までの人生経験で理解していた。

時間にして五分も経っていないのだが、倉守はご機嫌斜めになっていた。

いきなり連れてかれたと思ったら逆に放置だ。

俺でも怒る。

と言うか俺はさつき似たような状況に合わされて怒ってた。

俺は謝罪の言葉を述べると、倉守は一応満足そつな顔をしていた。ハッキリ言つて下手に出るのは好きじゃない。

でも、こういう関係にしておくしかない。

俺にはこの学園で絶対に取り戻さなければならぬ物がある。

その為には優秀な和音コードが必要だ。しかしそれが手に入らない以上実力の低さを相性の良さでカバーするしか、俺には打開策が見つからない。

会話はぷつりぷつりと定期的にとぎれてしまう。しょうがないので、俺はその場で見つけた物とかを話題に出してはみるけれど、美海は意図的に会話を止めようとする。

そんな会話とは言えない会話をしながら、俺たちは学生寮にまで

来ていた。

学生寮は基本的に全て構造が一緒だ。なので極端な当たり外れと言う物は存在しない。あえて言うなら駅が近いとか、隣人がとてもいい人だったとか、隣人は音量全開でデスメタルを聞いていてうざいとか。当たり外れなんてこれぐらいだ。

「倉守、お前何号室だ？」

「203号室」

「今、203号室って言ったか？」

「言った」

「俺も203号室だ」

お互いに何とも言えない空白が出来た。さっきの会話の比じゃない。今すぐここから逃げたい。できれば昨日ぐらいに。

俺は携帯電話を取り出すと、氷河氷柱（おじさんではなくて先生）と自己主張の激しいアドレスに電話をかけた。

「やあボクの予言は良く当たるねえ。教師を辞めて占い師にでもなりたいぐらいだ」

「ほんと教師やめてくれよ」

「やれやれ、女の子と同居するのがそんなに嫌なのかい？　ボクが同じ年齢の頃なら、大喜びしているぐらいだよ。当時のボクは女の子と一つ屋根の下で暮らして朝起こされたいと常々思っていたからね」

「てめえの妄想なんて聞きたくねえ！　何でそんな無茶苦茶な話が通るんだよ！？　何か間違いがあったら大変だろ！？　倫理的におかしいだろ！？」

「ほう。樹里と二週間前まで一緒に生活していた君が言うのかい？　片腹痛い。」

「俺以外の生徒達の話だ」

樹里に関して言えば、異性と認識するのが難しい。

「簡単に説明すると、和音^{コード}同士で衣食住を共にした方が、相性が良くなるのは君は身をもって知ってるはずだ。それを全生徒にもして

貰おうと言っただけだよ」

「倫理的にありえない！」

「君は楽しいことを言うね。この学校に入るときに人を殺すかも知れない。殺されるかも知れない。そのような決意を胸に抱いて来るし、実際に書類にサインまでしているのに、今さら男女の同居ぐらいで文句を付けるようなのは、この学園ではやってはいけないね。個室が欲しいと言うなら学園ランキングの上位に入れば特典で貰える。君の実力なら十二分に可能だろ？」

俺は人を殺す覚悟をしてきた。きっと倉守も樹里も同じように決意して来たはずだ。

「おじさん俺が悪かった。ごめん」

「君が謝ることは無いよ。同居の話を学校に持ちかけたはボクだしね」

「お前が原因かよ！！ どうしこんな無茶が通るんだ！」

「ボクは魔法使いとしては三流だけど、人心掌握は一流なんだよ。折角だから説明すると、同居で開いた学生寮を他に貸し出す為だよ。他にも色々諸事情があるけど一番の理由はこれだ」

「本音は」

「面白そうだったから」

「死ね！」

「君はそうやって怒っているけど、男同士でむさ苦しく同居する人々に土下座しなくちゃいけないと思わないのかい？」

「全く」

俺としてはそっちの方がまだマシなんだよ！

「そうか。とにかく同居するのも変更は無い。ボクも忙しい身だから失礼させてもらうよ」

俺が文句を言う前に携帯は切れてしまった。

「……クソ野郎！！！！！！！！」

一人暮らしになるからアニメグッズに囲まれて暮らせると思ってたのに！

今まで頑張って樹里にもばれずにオタクやってきて、高校に行けば一人暮らしになるから、好きなだけ囲まれて暮らせると思っている！

あのジジイ！

魔法少女かなめマギカのトモエさんのフィギュアとか、トモエさんのおっぱいマウスパッドとか、トモエさんの抱き枕とか全部買えないだろ！！

「ちよつと」

「ああ！？」

「ごめん…なさい……」

悪いのは倉守じゃなくておじさんだ。それなのに倉守に怒りをぶつけたってしょうがない。

「ああごめん。同居で間違い無いって」

「そんなのってありなの！？」

「君たちは人を殺すかも知れない覚悟、人に殺されるかも知れない覚悟をしてきたのに同居ごときグダグダ言ったってさ」

犯されるかもしれないと言う危険性は、殺すかも知れないと言う覚悟の中に内包されている。らしい。

ところで、一人暮らしだからアニメグッズを収集しようとしていた俺の願望は？

「——倉守ってアニメ見る？」

「見ないけど、何で？」

俺の希望は途絶えた。

出会い編3

女の子と同居したらキャツキャウフフの桃色ワールドが始まると思っているのならば、まずその桃色な脳味噌をどうにかしろ。

現実そんな甘くない。

部屋の右半分を倉守の陣地になり、左半分を俺の陣地になった。

一歩踏み込む毎に、百円の休戦協定条約だ。

脱衣所でバツタリとかそんなイベントが起きるわけもなく、手作りの料理が出てくるわけでもない（朝食と夕食の準備は俺の役割だ。昼食はお互い別々）

現実全く逆だ。

「何でお前があたしより先に風呂はいつてんのよ!」

と俺は生まれたままの姿を見られたり（しかも怒られた）

「朝食はトーストか目玉焼きじゃないの!？」

と俺の朝食までトーストと目玉焼きにされた。（俺は納豆が食べたい）

学校始まってから最初の日曜日、俺は樹里を呼び出して昼食を取っていた。

「だいたい俺より早く起きてるなら、自分で作れよ! 五時起き of 俺より先に起きてるなら役割交換したって良いだろ? 風呂掃除とかさ」

俺はファーストフード店の中で頭を抱える。文句は山のようにあるし、山のように言っただけで、改善される見込みは無い。

「ノボル静かにしないと」

口に手を当てて左から右へお口にチャックの動作もセットで樹里は言った。

ちらりと俺たちのことを見る人間が確かにいた。

「ああごめん。にしても樹里は良いよな」

樹里の同居相手は名家の一つに数えられる風間のお嬢さんで、かなりハイテンションで楽しい子だった。

「一緒にいて楽しいけど、やっぱり生活はみんな違うからいきなり同居生活になつてすりあわせるのは大変だよ。風間ちゃん。お片付け出来ない子だし、無許可で私の箒に乗っちゃうし」

箒は空を飛ぶ魔法道具全般の事だ。大体の箒はバイクとしても使えるし樹里が持つてるのもそのタイプだ。ついでに魔法特区内で箒として乗る分には免許不要。

「お互いに苦労してるって事か」
「でも。慣れるよ」

だといいいけどなあ。口には出さなかった。

「あ、みみちゃんだ」

俺は周りを見渡した。倉守がトレイを持って右往左往していた。

「みみちゃ〜んこつちこつち!」

その呼びかけで倉守もこちらに気づいて来た。嫌な奴にあつちまつたって目は見なかったことにしてやるよ。

樹里は席を詰めると、おいでおいでと倉守を手招きする。

「あんたと会いたくないから外食にしたのに…」

「もう、そんなこと言わないの」

文句を言いつつも倉守は樹里の隣に座った。

「二人とも何してんの?」

「みりや解るだろ昼食だよ」

お前の愚痴をしてました何て口が裂けても言えない。

「ふーん。そう言えばさ前に聞きそびれてたけどあんたらの関係って何なの、彼女?」

樹里は飲んでたコーラを吹いた。

「違うよあただの幼なじみだよ」

少し頬を染めて首をぶんぶん横に振っていた。犬みたいだ。

「ああ彼女じゃなくて、許嫁だもんな」

今度は樹里と倉守が同時に吹いた。

「マジ？」

「マジ！」

俺は目線で樹里を見るように言う。樹里は顔を真っ赤にしながらうつむいていた。

「マジだ…今時本当にそんなのあんなのかよ」

魔法使いの家だと今でも極々普通の風習だったりする。

「なんでノボルは言うの？恥ずかしくないの？」

少し涙を流しながら樹里は俺のことをぼかぼかと叩く。力が入っていないので全然痛くない。

「お前のそう言う反応が可愛くてつい言いたくなる」

「ひどいよお……」

許嫁って言っても諸事情で有名無実かしてる事を樹里が倉守に説明すれば、俺も本当の所を話しても良いのだけれど、

樹里はそう言うことを一切言わないので俺も言わない。

「熱いわね」

「それに――」

樹里は自分の食べかけのハンバーガーを俺の口の中につっこんでまで、俺の次の台詞を止めた。

「みみちゃんってどんな趣味なの？」

「どくしょ……お前今ぜってーわらっただろ」

口の周りがケチャップだらけの状態でそれどころじゃない。俺はハンバーガーを樹里に返し、口の周りを紙で拭いた。

「他人の趣味で笑わねえよ」

そんな事を言い出したら俺の趣味が一番最初に笑われるだろ？

それに熱心な奴バカにするのは父が……俺が許さない。

「勘違いして悪かったよ」

「ねえみみちゃんの読む本ってどんな本なの？ミステリー？」

「笑うなよ。ぜってー笑うなよ！それにあたしはお前じゃなくて、氷河に向かって言うんだからな」

世間一般でそれは笑って欲しいときの前振りであるのだけれど、

立ち上がって身を乗り出してきてるのだから、お約束ではなくて、本当に笑われたく無いらしい。

「じゃあ樹里に向かって言えよ」

「……………れんあいしようせつ。ほら、どうせあたしみたいな暴力系女子にはにあわねーとか思ったでしょ！」

キャラと合わないのを気にしていたのか。

「キャラに似合っていないって話なら樹里も全然似合っていないぞ。こいつの趣味箒だし」

その次の趣味がゲームで好きなゲームがマリオカートと言つのが、俺をとて不安にさせるけどな。

「風と一緒に感じる感覚って気持ちいいよ。良かったらみみちゃんのオススメの小説教えて欲しいな」

会話自体は三十分もたつてなかったと思う。

しかし今まで俺が倉守に抱いていた取っつきにくさは大分軽減されたように思える。やはり女の子の話し相手は女の子って事なんだろうか？

「きつとみみちゃんは無理してるんだよ。環境になれたらきつと良い子になるよ」

倉守が用事があると言つて立ち去ったあと、樹里は笑顔で言つた。

「じゃあ樹里はどうして倉守が無理してるんだと思う？」

「それは、私にもちょっと」

まあ、それは本人から聞くしか無いだろう。

この一件で関係が劇的に改善されると言つのならば、その二次元に浸食されすぎた脳味噌をどうにかするべきだろう。

あれは、俺と仲良くしてたんじゃないくて、樹里と仲良くしてただけだし。

むしろ、状況としては悪化していると言って良かった。

魔法高校での授業の大半は魔法実技、工学魔法、魔法理論の三つで構成されている。

さらに二年から、アーティファクト魔法道具、戦闘魔法、工学魔法、純粹魔法、のコース別選択が待っている。

一般的な魔法を教える学校では実技魔法は行われずに、戦闘魔法を除いた三つからの選択になってる。理由は簡単に魔法使い同士の戦闘は危ないからだ。

そのため日本で学校と言う形で戦闘魔法を学びたいのなら魔法特区に来るしかない。おかげで魔法実技の授業になると、普段は炭酸の抜けたコーラみたいな不良生徒達でも、シャキッと背筋だけは伸ばすはずなのだが、

倉守美海は見事に爆睡していた。

と言うか何でこいつ寝てるの？ お前いつも十時ぐらいには寝てるよな？ 用事が無いときは外ほつつきあるいて、帰ってきたと思ったら飯風呂寝るのくたびれサラリーマンみたいな生活してやがるのに。

同じ釜の飯を食うを実践しようと思った結果。冷えたご飯を一人で食べることも珍しくないんだぞ？

二人一組で学ぶ魔法高校では、成績もある程度二人一組で決められる。席もお互い隣同士で配置されるので、起こすのは必然的に俺の役割になってしまう。

そろそろ倉守が先生に指されるタイミングだったので、俺はほっぺを押した。押した。さらに押した、九十度のひねりも加えてみた。

だが、残念ながらこの死体、ただの屍のようだ。

しょうがないゆするか、と思ったときにはすでに当てられていた。さらにタイミングが悪いことに当てられたタイミングでは寝ぼけながらも立ち上がってしまった。

「倉守、遅延魔法について答えろ」

壮年の教師はすでにため息をついていた。

「……チェンマ法？」

「よだれたれてるぞ」

それedyやく倉守は現実に戻ってきて、ハンカチを出して口と机を拭いた。いや、だから何で俺を睨むの？

「しょうがない。火野お前が答えろ」

「遅延魔法は魔法のタイミングと場所をあらかじめ指定して行う魔法で、特長は二つで発動する時には二人ともその場にいらなくても良いこと、発動するまでの合間に、魔力の配合比率を変えられるので、普段の戦闘では出せないほどの高威力の魔法を使えること、代わりに一度遅延魔法を行ってしまったら解除は本人でも出来ないのので、気をつけなければいけない」

「完全な答えだ。倉守、付加魔法については答えられるだろ？」

倉守は沈黙を貫いた。

だから俺を睨むの止めるよ。

「……火野答えろ」

「自分ではない物に魔力をつぎ込む魔法で、大きく二つの分類に分けられる。一つは魔法道具生成魔法で、道具に魔力を注ぎ込むと特定の魔法が使えるようにできる魔法。もう一つは付加属性魔法で、一時的に道具そのものの性質を変化させる魔法であり、戦闘では主にこちらを使う。」

「よろしい。いいか倉守、確かに魔法実技の最初は座学で退屈かも知れないが、ここでの事を覚えてないと受業で死ぬぞ？」

火野には申し訳ないが、良い参考例なので言わせて貰うと、七年前の721蒸発事故はその典型だ。最強の魔法使いですら、魔法の

扱いに失敗して死ぬことがある」

俺は平静を装うしかなかった。

はらわたが煮えくりかえるのを歯を食いしばり耐えた。

立ち上がって言いたかった。親父はそんなヘマをしないと。

教師は次の魔法に関する話をしようとしたが、チャイムは昼食の時間を告げてしまった。

倉守は昼食の時間になるとすぐに、教室から抜け出てしまう。食堂に行ってるのか、それとも外でランチでもしてるのか、俺には解らないけれど、昼休みの時間にあいつと合ったことは無い。

俺も俺で、教室や食堂では取らずに、屋外で食べることがほとんどだ。何故って？

アニメの話がしたいからだ。

「お前よくあいつと楽団^{バンド}でいられるな」

俺は仰木修也^{おのめしゅうや}とよく昼食を共にしている。彼の和音^{コード}もやはり女子で、やはり彼もアニメ好きでお互いに似たような境遇だったので一瞬でうち解けた。

楽団^{バンド}は魔法使いのチームの事だ。火野と倉守の楽団^{コード}って感じに使われる。

でも、かなめマギ力で青ホムは一生来ないぜ？

「キャンセルする訳にもいかないだろ？」

「そうだけどさ、俺なんか会話もあきらめてるのにさ。やっぱ女は二次元だよ」

の割には修也と和音^{コード}は中良さそうに見える。隣の芝生は青いのか、それともアニメの話をあきらめてるのかさて、どちらだろうか？

「でよ。女子でも昼食時の倉守が何をしてるか知らないらしいぜ」

「あいつ友達いないのか？」

「だろうな。ガツカリで許されるのは二次元だけと心得る。それより今期は何見るか決まったか？」

よだれを垂らした恥ずかしさで、授業態度が改善されたかと言うと、答えはノーだ。むしろ乙女をそこで捨てたとばかりに、以降の授業も寝まくっていた。しかもちよつとやそつとじゃ起きない物だから、倉守が指される時になると俺が答えることになった。

俺が答えるのは別に問題じゃない。俺にとってはすでに知っていることばかりだ。

しかしこの学校で初めて魔法を学ぶ倉守にとっては、一字一句聞き逃してはいけない言葉、戦場で生きていくために必要な鉄の掟のはずなのだが……

朝早く起きて、授業は眠り、学校が終わるとどこかへ消え、家に帰ればすぐ眠る。猫と同レベルの自由気ままな生活を倉守はしていた。倉守と俺が赤の他人であつたなら、どうしても良かったのだけど、^{コード}どういう事だか俺の和音だ。

だから思わずにはいられない。

授業を起きていたら、

対話しようとしていてくれたら、

真つ当な生活をしていたら、

もしここが魔法特区でなかったら、

俺は倉守に対してこう思うことは無かつただらうと。

その事を思いついたのは、ある晴れた日だった。

カーテンを開けると雲一つ無い空が見えた。

初夏の柔らかな日差しの中で俺はハンバーガーでも頼むように、事務的な挨拶でもするように、朝起きたら歯を磨くように、何となく思いついてしまった。

倉守美海を殺そうと。

そうすれば、俺の《コード》は樹里になるだろう。

ここは魔法特区。

殺人が許される町。

人を殺すことを覚悟と人に殺される覚悟を持って来る学園であることを。

それは俺が人を殺す覚悟がすでに出来ていると言っていること。

それは倉守も人に殺される覚悟がすでに出来ていると言っていること。

出会い編 4

そこまで思考がたどり着くと行動は早かった。その日の授業が終わると俺は早速魔法特区内の法律と校則を調べ始めた。

人殺しを容認してるけど、サスペンスドラマよろしく、ナイフでさされてたり、毒殺されたり、ちよっと違うが強盗、詐欺、なんてしたら当然捕まる。

あくまで魔法使い同士の決闘、模擬戦、などに限られる。

逆に言えば決闘と模擬戦ならば、いくら人を殺しても問題が無いどころか、むしろ魔法使いとしては箔がついてしまうし、中には人を殺すことを目的としている奴までいる。

自分の和音コードを殺すのは難しいが、自分の和音コードを殺して貰うのは難しく無い。それが俺のたどり着いた結論だった。

もちろんその場合は共犯者が必要になってくる。

しかしながら、共犯者を見つけるのは容易だ。

人を殺してでも、金が欲しい、地位が欲しい、箔が欲しい奴はこの学校にいくらでもいるのだから。

例えば、仰木修也とか。

次の日俺は修也に倉守を殺したいと言うこと、それに協力して欲しいと言うこと、倉守を殺すことでどれだけプラスが生じるかと言うことを懇切丁寧に話した。

修也はそれらの話をひたすら黙って聞いていた。

そして俺が全てを言い終わると「やらせてもらうぜ」の一言の後に、修也は色々と言りはじめた。

実家が貧乏であり引け目を感じている事、自分は魔法使いとして有名になって金持ちになりたいと言う事。そのためには入学当初か

ら注目される何かが必要だと思っていた事。

俺は人目のつかない校舎裏に修也と共にいた。

「俺も和音^{コード}がウザイと思ったことはあったけど、殺そうって思ったことはない。イかれてるよ」

と言いつつ俺が投げ渡した結合指輪^{リンクリング}を指にはめているのだから、人のこと言えたもんじゃない。

「ウザいとも思っていない人間を殺そうとするお前の方がよっぽどイかれてると思うぜ？」 もっと言えばウザイから殺す訳じゃない。目標の為には殺すしかないって結論が出たから殺すだけだ。

俺は人殺しを楽しむような酔狂では無い。

出来れば、今だって殺したく無いと思っている。

倉守があと少しでも協力的だったら、頑張って魔法に取り組んでいたら、そうしたら弱くてもどうにかできるのに。

俺が考えた倉守美海の暗殺計画はいたってシンプルだ。

事前に遅延魔法を修也の体に入れておく。

修也達の楽団^{バンド}と俺と倉守の楽団^{バンド}で戦う。

そのタイミングで修也の遅延魔法を発動できるように仕組んでおく。詳しく調べない限りは修也がその場で魔法を使っているようにしか見えない。

遅延魔法の内容は相手に魔法を使われた時に、水属性の魔法三十六回連発する事にした。

一年生が使っても怪しまれないギリギリのレベルで、倉守を殺すなら十分だ。

どんなにミスしたとしても病院送りは免れない。

俺は修也に魔力を送り修也に遅延魔法を自分にかけて貰う。十五分程度で遅延魔法は完了した。

「これで明日の試合俺が倉守を殺すことになるんだな」

「ああ、それでお前は学園で一目置かれる存在になる」

「緊張するな」

「人殺しは一般的に忌避されるからな。でも、魔法使いにとってはそれは違う。どちらかというともっと身近な物だ。だから緊張するな。この学校にいて、人を殺さないで卒業できる方が、珍しいだろうから」

俺はそう言つて修也をなだめた後、解散する事になった。

今でも俺はあの瞬間のことを忘れられない。

2004年7月21日

当時8才であつた俺はそろそろ来るであろう夏休みの事で頭がいっぱいだった。修行ばかりの日々になることは解つてはいたけど、それでも何かと遊びに連れて行つて貰えるからだ。

その日は特別と言つほどの事でも無いけれど、父は東京で戦つてになっていた。

当時の父は魔法使い同士の格闘技であるウィザードの選手であり、日本ランキング世界ランキングともに一位だった。それに加え日本魔法協会の理事長でもあつた。

俺にとって父は周りに自慢できる存在だった。そして俺は父を超えるようなもつと偉大な魔法使いになるとその時から心を決めていた。

父の試合を俺はテレビ越しに眺めていた。今思い返すと父の試合はつまらない。だってピンチにならずに一方的に倒してしまうからだ。

でも、それが良かった。ああやっぱり父さんは強いんだ。そう当

時は思えたから。

しかしその日の試合は違った。父は大分苦戦していた。俺はそれをまばたきすら惜しむように画面に食いついていた。

そしてPM20:11。画面はぷつりと消えた。

最初はテレビの故障だと思った。一緒に見ていた母はテレビの故障では無いかと疑っていたし、姉は自分専用のラジオを取り出して、試合の状況を知ろうとした。

どちらも間違っていた。

正確な情報が入ってきたのはそれから数分後。

ウィザードの試合中に東京会場が消失した。

番組は次々と事故現場を写し始める。

そこには最初から何もなかったかのようにぽっかりと空間が空いているだけだった。

意味が解らなかった。

無敵である父が死ぬわけがない。完璧である父がこんな事を未然に防げないわけがない。俺は母にそうやって主張したけれど、母と姉はひたすら泣きじゃくるだけだった。

そこからはもう転落するだけであった。

事故の原因は父の初歩的なミスであったこと。

父が日本魔法協会で大量の裏金作りをしていたこと。

そうして過去には名家を序列していけば最初に来ていた火野も、今では良ければ最後、悪ければ除外されるようになってしまった。

だから俺はもう一度名誉を取り戻したい。

父は強いと言うことを俺が勝利を掴むことで証明したい。

できるのならば、父がそんな間違いをしていないと言うことも。

きつと誰かにはめられたのだと。

嫌な夢だった。

定期的に721蒸発事故の日の事を夢に見てしまう。夢だと解つていても、やはり俺は冷房の効いた部屋でコーラを飲みながら、父が苦戦している姿を眺めてしまう。

そして画面はぶつつりと消えて、ニュースの速報が入って来て――

もう考えるのを止めよう。

俺は枕元にある目覚まし時計を手を取った。

AM4:32いつもより少々早い時間である。美海の布団の方を見ると、美海はすでに起きているようで、もぬけの殻だった。

あいつホント何であんな早起きなの？ その習慣治して受業起きろよ。

いつもの俺なら、朝食を食べ一時間ほどジョギングと筋トレをしてから学校に行くのだがけど、何というか、気分が良くない。

それが夢を見たせいなのか、これから人を殺すからなのか俺にはよく解らない。

いいや、シャワーでも浴びてサッパリしようじゃないか。

そう思い俺は脱衣所を開いた。

そこには一糸まとわぬ姿の倉守がいた。

ああ、一応あったんだね胸。

もっと繊細な描写も時間があれば出来たのだろうけれど、残念ながらグーパンチでぶん殴られた後に、扉を閉められてしまった。

前に見られてしまったとき俺が怒られたんだからここは怒る場面だよな？

一分もしないうちに倉守は脱衣所から出てきた。何故かランニングウェアを着ている。

「最低」

「んな時間にシャワーを浴びるなんて知らなかったんだよ。ってか何でお前ランニングウェア着てるの？」

「んなのあたしの勝手だろ」

「ジョギングしてたのか？」

倉守は不機嫌そうに口をへの字にまげて視線をそらす。どうやら本当らしい。前に早起きして何してるか聞いたら読書って言うのに……

「……笑えよ。どうせ天才のお前から見たら、あたしのしてる努力なんて馬鹿馬鹿しいんだろ。」

聞いたよ。あんたつてすごい強い魔法使いなんだってね。本来ならあたしと和音^{コード}になるはずが無いほど飛び抜けて強いって、そんな俺様なあんたから見たらあたしのしてること何ておままごとみたいなもんよね。

あんたはあたしの目の前で差を見せつけて、さらに伸びていくのに、あたしと来たら学校入ってからずっと魔法の特訓してたけど、何の成果もねえしな。

だから笑いなよ。あいつらみたいにさ」

「俺は笑ったりしない！！」

和音^{コード}が弱いと嘆くことはあっても、

日常生活が悪すぎて殺したくなっても、

努力してる人間を笑うことは絶対にしない。

父が俺にそう教えてくれたから、父のように俺は成りたいと願うから。

強くなりたいと強く願い実行しているのなら、目に見えていなく

ても、いつかたどり着けると信じているから。

「強くなりたいたいなら俺も今日からトレーニングに付き合う」

倉守の目が点になった。

「笑わないのか」

「何で笑う必要があるんだよ。俺だって五歳の時から毎日練習練習練習だぜ？ 確かに俺は名家の出だけど、それだけで強くなれるほど魔法使いつてのは甘く無い」

「ほら、でもあたし、不器用だし、話すの下手だし、友達少ないし」

「んなの全然関係ないだろ、でもお前不器用で、話すの下手で、友達少ないな」

「んにやろー いやがって！」

倉守は俺を殴る。全然いたくない。

お互いに笑い合う。そう言えば倉守の笑顔を見るのは初めてかも知れない。

何だ。可愛い顔してるじゃん。

「倉守、俺はお前に謝らないといけないことがある」

「ん、あんたは何もしてないじゃん」

「だからこれからするんだよ」

「意味わかんないけど何すんの？」

「今日の模擬戦でお前を殺そうとしていた。遅延魔法で止められそうに無いから今日の試合には出ないでくれ」

濁いた笑いが交差する。

俺はグーパンチで殴られた。

出会い編5

そりゃあ誰が悪いかと言えば、全面的に俺が悪いのだろうけど、まさか最強であるはずの俺が最弱である倉守の右手パンチだけでやられかけるとは思ってた。こういう展開はアニメ限定にしてみたい。

「あたし、今日の模擬戦でるからな」

「いや、お前ホント死ぬぞ!？」

「事前に攻撃来ること分かっているのに死ぬわけーし、あたしの事なめんな！」

「とにかく、出るなよ！絶対に出るなよ！」

「解った解った。でてやるゝって」

「やれやれ、とため息しか出てこない。」

「それにお姫様は自称最強の王子様がどうにかしてくれるって信じてるしな」

にへらにへらと倉守は笑っていた。

今日のランニングは中止だ。

どうやって倉守を俺が仕掛けた遅延魔法から救い出せばいいか、考える時間が必要だったからだ。

死刑宣告を受けた倉守と言えば、機嫌良さそうにシャワーから上がってきたところだったりする。

「シャワー上がったよー」

「もう朝シャンするような気分じゃねえよ！」

「うん？ あたしが死んじゃうから」

「それ以外にあるか!！」

「あたしの事をそんなに思っ……ほれんなよ」

「惚れねえよ！ だいたい何でそこまでして出たがるんだよ模擬戦」
「出ないと成績響く」

「散々授業中寝てきた人間の言う台詞がそれか！」

「散々授業中寝てたからさあ余計に出ないと不味いじゃん

それにさあ。何であたしが出るの止めなきゃいけないのよ。ふつーに考えたら修也を出さない方が正解でしょ。あるいは修也に掛けた遅延魔法を解除するとか、なんで被害者のあたしが一方的に被害被らなきゃいけないのよ」

「ああ！ それだ！」

そうだよ。それを最初に考えるべきだったんだ。

「あんたって緊急事態になると頭が回らなくなるタイプ？」

反論できなかった。

修也に掛かってる遅延魔法を外すには修也の強力は絶対に必要だ。一応発動条件を満たすように修也に襲いかかると言うことも出来なくは無いか、

逮捕されてしまう。

本末転倒もいいところだ。

魔法特区は戦闘狂の殺人鬼に優しくても通り魔には優しくない。それにこの場合だと倉守を殺そうとしていたと修也が誰かに漏らしてしまう可能性だって出てくる。

詳しく調べられれば俺がやったことぐらいは覚えてしまっただろう。

「断る」

修也は即答だった。

修也の携帯電話が繋がらなかったのもホームルーム前に、やはり殺すのは中止になりました。と、とても丁寧に言い回した結果がこれだ。

「お前に取っちゃ人の命なんてすつげえ軽いんだろうな。

三万二千百八十二人だったっけ？ 721蒸発事故」

「今回の事とは関係ないし、俺の事でもないぜ」

俺は出来る限り平穩を装っていたが、それがきちんと出来ている自信は何一つ無い。

「まあ魔法使いの家じゃ人の一人や二人殺して当たり前なんだろう？
気まぐれで殺したり殺さなかったり、まるでゲームだな。俺にと
つてはこの模擬戦一生が変わるかも知れないんだぜ？」

「お前が倉守を殺して評価されたとしてもそれはお前の力じゃない」
「そんなの知ってるさ。」

でもまずは注目されないと。俺はお前と違って金も才能も地位も無い。

だから今回のことはチャンスだと思ってる。

例えば俺の実力が最終的に露呈してしまったとしてもコネとか作れれば今よりは絶対にマシになるからな。

それに倉守は強くないが、今年最強どころか学園内最強候補の一人であるお前の和音^{コード}だ。魔法使いを楽団^{バンド}で見る人なら、人を三十人殺すよりもよっぽど高く評価する」

これ以上交渉の余地は無いとでも言うように、修也は自分の席に座りヘッドフォンを着け携帯電話を弄り始めた。

模擬戦は五時間目から行われる。

昼休みに作戦を伝えたけれど、きちんとやってくれるのだろうか。
ハッキリ言って心配だ。

模擬戦は学校近くにある闘技場で行われる。

魔法特区内にはスーパードと闘技場が同じ数だけ存在していると言われている。

なぜそんなに有るかと言えば生徒の自主練から、中小企業が魔法^{アーティ}道具^{ファクト}の実検に使ったり、生徒同士が明日の昼食代を賭けて勝手に戦

つたりと、多種多様に使われているからだ。

もちろん当然魔法特区内にある魔法高校も闘技場のお世話になる。闘技場内は一般的な体育館とそこまで変わらない。あえて言うなら真つ平らであるべきなのが体育館で、真ん中に大きなリングが設置されているのが闘技場だ。

「模擬戦の前に和声魔法の手順について復習するぞ。」
ハーモニー

「まず楽団は入力、出力の役割を分担して行う。」
バンド イン アウト

「まず入力は大気中にあるマナを体に取り込む、取り込んだマナをアンプリファイア・転調回路に入れて魔力に変換し出力に対して魔力を送る。」
アウト リンキング

「出力は結合指輪から送られてきた魔力を混ぜ合わせたり、発動を指定したりして魔法を実行させる。」

例えば炎の魔力が送られてきたとしよう。出力は体内で発動させることによって、自らの身体能力を向上させることも出来るし、体外に発動させることによって火を起こすことも出来る。実際に行うタイミングを指定しさえすれば遅延魔法になる。

もちろんそれらを同事にこなすことも出来る。慣れれば、炎と水を同事に体内で発動させつつ、風と土を混ぜた魔法と炎魔法を体外で使うことだって出来る。

今回の模擬戦はドールマスター戦で戦う。ドールマスター戦について、くらしも……火野答える」

「は、はい!？」

話を全く聞いてなかった。

「じゃあ倉守起きてるみたいだからお前が答える」

「ドールマスター戦はお互いの出力だけが戦うルールで入力はリングの外にいて攻撃してもされてもいけないルールです」
アウト イン

「初めてまともに答えてくれて先生はとても嬉しいけど、倉守は体育の時間だけ張り切る小学生と一緒だな」

そこかしこで失笑が漏れた。

「ルールのにはどこにいても良いが、結合指輪で魔力を渡すときにお互いの距離が遠ければ遠いほど貰える魔力が減っていく。」
リンクリング

逆に近ければ、魔力の減りを最小限に防げる、さらに手を繋いでいる状態だと結合指輪^{リング}なしでも魔力を減らさずに受け渡す事が出来る。

ドールマスター戦のルールでは手を繋ぐことがリングの中に入ると同じ行為になっているので出来ないが、出来る限り和音^{コード}の近くにいろ」

倉守と修也はリングにあがる。

本来のウィザードのリングならば一辺が88メートルで出来ている正方形の物を指すが、この闘技場にあるのはその半分である44メートルの物だ。それでも十二分に大きいように感じられるかも知れないが、一流の魔法使いにとっては鳥かご並みのサイズだ。

倉守と修也はお互いに20メートル離れた位置で対峙する。

（昼休みに言った作戦大丈夫だな？）

俺は結合指輪^{リング}越しに倉守に話しかける。

（アレを作戦って言うの？ もう始まるから黙っててよ）

ホイッスルが鳴り響いた。

俺は早速大気中のマナを体に取り込み始める。

自分が炎そのものになるイメージをして貰えると、マナを取り込む事とマナを魔力に変換をする事が何となく解って貰えるかも知れない。

ドールマスター戦は一般的に派手な戦闘になりがちと言うことで人気だが、魔法使いの視線になると状況は一変する。

入力^{イン}が出力^{アウト}に的確な指示と魔力を送り続け、出力^{アウト}はその言うことを出来る限り聞きながら状況を相手に伝える。

まさに人形遣い《ドールマスター》の戦いと言うわけだ。

もつとも、それは熟達した腕前と阿吽の呼吸が出来る楽団^{バンド}の話だ。倉守に子細な指示を出したところで混乱するだけだ。

なので事前に出した指示は、木属性の魔力を送るから体内魔法だけ使え、攻撃のタイミングなどは全部任せる。こちらが指示した時

に体外魔法を使ってそれ以降体外魔法を好き勝手に使え。

……うん。ほぼ無策だ。

俺が体外魔法を使うなと言った理由は体外魔法の発動を遅延魔法発動の条件にしたからだ。

体外魔法による攻撃、水魔法なら氷の具現化による串刺しを防ぐうと思うのならば、同じく何らかの体外魔法を使うのがセオリーだ。火なら炎、風なら高圧縮された空気など、そういった物をぶつけて相殺させる。

事実、試合開始直後から修也は水属性の魔法を放っている。

二メートルほどの氷柱状の氷が地面から突き抜けてくるインパクトのある魔法だ。

しかし、攻撃そのものは直線的な動きで一発一発間が空いているために、倉守は寸前の所で後ろに避けることが出来ている。

俺は俺でもう一つやらなければならぬ事があった。

周りを見渡すとすぐに見つけることが出来た。

俺はリングを見ながらそちらの方向に移動する。ドールマスター戦では入力^{イン}の動きを見て、出力^{アウト}の動きを事前に予測すると言った事がある。

もちろんその逆に相手に予測させるためにわざと離れた位置に移動することもある。

そのため移動そのものは誰にも怪しまれ無かった。

試合は完全に劣勢だった。逃げ回るだけの倉守であるが、攻撃は何度かかすってしまったている。それに対して修也は一步步つ全身しながら体外魔法でリングの端に追い詰めている。

木属性の体内魔法は全体的な身体能力の向上だが、それにだつて限界はある。身体能力を向上させるために魔法を使って体を酷使させている訳なので、一瞬の為に長期的な力を先取りしてるような物だ。

もうこれ以上倉守に逃げさせるのは無理だ。

遅延魔法の発動が無くても、修也からの攻撃を二、三度直撃するだけで生死に関わってくる。

（ぶっぱなせ！！）

「はいよおおおおおおお！！！！」

倉守の指輪は真紅に輝く。

魔力が体外に放出されるとき結合指輪リンクリングは輝く性質がある。

それとほぼ同時に修也の背後上部に巨大な氷の固まりが出現し、そこから触手のようになめらかに動く水が倉守をめがけて襲う。

今だ。

俺は樹里の手を握った。

その瞬間世界は凍り付いた。

時間停止は俺と樹里が使う魔法の中でもっとも得意な魔法の一つだ。

通常の戦闘なら8秒ほど止められる。

しかしながら、これは戦闘ではない。戦闘なら時間停止後の行動なども考えて、ある程度余力を残しておかなければ成らないし、止まった時の中で何かをしようとするならマナと魔力を時間停止とは別に用意しておかなければならない。

しかし今そんな事はどちらも些末な問題だ。

三十秒。

三十秒は俺と樹里の世界だ。

俺は樹里に引っ張られてリングの上にあがる。

今にも襲ってきそうな三十六本の氷の触手一つ一つに、木属性の

体外魔法で作られた樹木達が、数秒後に破壊できるように設置しておく。

この作業が意外に難航してしまう。

あんまりにも出来が良すぎると介入がばれてしまう可能性がある。あくまで倉守が出来そうなギリギリのレベルにしておかなければならない。

樹木の設置が終わり俺と樹里は元の場所に戻った。

俺は樹里の手を離した。

時は徐々に本来の速度を取り戻していく。

瞬間的に表れた氷の固まりに対応して樹木がそれを蹴散らした。皆が呆然としている。魔法を使っているはずである倉守まで驚いてしまっている。

そんな中でも俺は倉守に供給する木属性の魔力を作り始める。時を止めたばかりなので、かなりきつい。

驚きはさらなる驚きによって覆される。

さきほど全て壊したはずの氷の固まりがもう一度、そこに出来上がっていた。

俺は一瞬何があったのか解らなかった。

俺が仕込んだのは36発を一回分なのだ。二回目に来るわけなんて無いのだ。

違う。

他の別の人が俺のを模倣して二回目を仕組んだんだ。

修也はこのことについてもう前に話していたじゃないか。

『魔法使用を楽団で見る人なら、人を三十人殺すよりもよっぽど高く評価する』

倉守を殺して利益を得るのは修也だけじゃない。修也の和音^{コード}も当然利益を得る。こちらが、どうにかして防げないかと思案していたときに、修也達は防がれてしまった場合の、保険として同じ遅延魔法をもう一回使うことにしていたのだ。

こうなってしまうと、ギリギリ使えるレベルの魔法にしまったのが災いになってしまう。

瞬間的に行う通常の魔法ではなくて、ある程度時間をかけることが許される遅延魔法ならば実力よりも上の魔法だって使えるだろう。ましてや、お手本まで手元にあるのだ。出来ないわけがない。

前話してたときは和音^{コード}と仲が悪いつて言ってたくせに、一緒に人殺しをしようだなんて超仲がいいじゃねえかよ！

（避ける！！！！）

俺に出来ることは全力で魔力を供給することだけだ。

倉守は最初の一撃を手元から発動していた木魔法でどうにか凌いだ。

氷は今までの単調な動きではなく、倉守にぶつかる瞬間まで水の形を取りながら、蛇行しながら倉守に近づいてくる。

しかし二発目三発目が足にかすりバランスを崩して倒れてしまう。四発目五発目六発目が倉守に襲いかかってくる。

「最強つて大した事無いんだな」

倉守は微笑む。

倉守の指輪がもう一度真紅に輝く。

倉守に向かって氷が刃状になって襲ってくる。そこを倉守は自らを吹き飛ばすように木属性の魔法を使った。

飛ばされた先は、修也の所だ。

不意を突かれた修也は身動きを取ることが出来ずそのままぶつかってしまう。

倉守は修也を羽交い締めになると、七発目八発目九発目の氷に対

する盾にした。

出会い編 6

試合結果は倉守の勝利で終わった。懸念してた遅延魔法も修也自身に魔法が当たった為に魔力と相殺してしまった。

倉守は死ななかったし、今回の模擬戦で修也の楽団^{バンド}はかなり注目を浴びることになった。そりゃ、遅延魔法と言っても72回分の水魔法なんてそんじょそいらの一年生のやることでは無い。

教師的にも詳しく調べようと思わせるレベルでは無かったらしく、特に詮索はされてない。

これで人殺しの疑惑が世間に出ることもなく、みんなハッピー、みんな幸せ、やっぱり物語はグッドエンドだよーね！

と言うわけにはいかなかった。

ホームルームが終わると、樹里が今までに見たことの無いような笑顔で（出来れば今後二度と見たくない）俺を手招きしていた。

一言もかわさずに俺は樹里の部屋に連れ込まれた。

女の子の部屋なのに、何も嬉しくない。

「ノボル。みみちゃんを殺そうとしてたよね？」

幼なじみの目はごまかせなかった。

十一年間も和音^{コード}やってたら俺が使いそうな魔法なんて一発で解っちゃうよね。

「私が昼休みで聞いたときは、仰木修也君がみみちゃんを殺そうとしてるって話だったんだけどな」

樹里が言い出す前に俺はすでに正座していた。

「そ、それはですね……」

「私ノボルに人殺しになって欲しくないなあ。自分のわがままの為に人殺しちゃう人はイヤだなあ」

「トテモハンセイシテマス」

「謝るんだったら私じゃなくてみみちゃんにじゃないかなあ〜？」

「ハイオツシャルトオリデゴザイマス」

樹里は子供っぽい笑顔をしながら俺の周りを歩いている。

そんな状態が何十分も続いた後、樹里は唐突に手をパンッと叩いた。

そして樹里はイタズラっぽく人差し指を口につける。

「もしもまた似たような事があつたら、パパに頼んで許嫁の話を無かったことにして貰うね」

「マジ？」

「本気だよ」

ウインクをする樹里は非常に楽しそうだった。

1 学期期末試験 美海VS樹里編 予告（前書き）

予告編と本編は違う場合があり、また、本編には出てこない台詞が出てくる可能性があります。ご了承ください。

またネタバレが嫌な人も見ない事を推奨します。

1 学期期末試験 美海VS樹里編 予告

魔法高校は実技点、日常点、試験点、の三つの点で成績を決めている。

そして倉守は日常点も、試験点もダメダメであった。

「私のミルちゃんが~~~~!!」

「あたしを名前で呼ぶんじゃないわねえ!!!! 風間ちゃんって呼べ風間ちゃんって!」

まあ恋愛ちゃんは無いよな。恋愛って言うか憐哀だ。

「もしかしてあたしこのままだと退学!？」

もしかしくなくてもテストが有ることは入学当初どころか入学前でも解ることだ。

そして退学しやすい制度であることも。

「そんなことより桃鉄しようよ桃鉄!!」

「俺は最強なんだぜ。死ぬわけ無いだろ?」
俺は微笑み樹里の頭を撫でる。

「倉守美海さん、死ぬ覚悟は出来てますか？」

1 学期期末試験 美海VS樹里編 1

魔法使いの朝は……別に早くない。

受業が終わってからがトレーニングの時間だ。

一緒にトレーニングをするように成ってから一ヶ月が経過し強くなったかと言うと、そんなすぐに効果が出るなら苦労しねーよ。

もちろんお手軽ですぐに効果が出るような素晴らしい物があるのなら、俺だってそれをやるだろうし、

倉守だつてすぐにでも実戦してただろう。

いや、実際に実戦していたと言った方が正しい。

倉守が自分でくみ上げたメニューはかなり上級者向けのメニューだった。少なくとも初心者に出来るわけがない。

では初心者にも優しくきちんと上達するメニューとは何か。

「もう、無理……」

倉守は息を荒げた。

「まだまだ、これからが本番だぜ？」

「え、そんな……」

初心者には7キロのジョギングは厳しいのだろうか？

もしかしたら魔法使いだから特殊な特訓でもすると思う人がいるかも知れないが、魔法使いのトレーニングなんて基本的には、一般的なスポーツとかぶる部分が多い。

一応魔法使いの家にだけ伝わる門外不出の特訓と言うものもあるけれど、あんな危険な特訓を一般生徒に考えなしにやったら、毎年死亡人数の桁が一つか二つ増える。

俺も火野に伝わる特訓を一度だけやった事がある。確かに効果覷面だったがもう二度とシタクアリマセン。

「ねえ、本当に短期間で強くなれる方法って無いの？」

「ンなもんあるか！」

火野の特訓方法を教えたら倉守は絶対やる！って言い始めるんだろな。

断言してもいい。やったら絶対に死ぬ。

「ほら、走れ走れ、後2キロあるぞ！」

「5キロで終わりじゃないの？」

「俺はいつも18キロ走ってるぞ。それに一緒にトレーニング始めてから一ヶ月そろそろ5キロから7キロにするには良いタイミングだと思う」

「うへー」

倉守はうなだれる。

「強くなりたいんだろ？」

「うん」

強くなりたいんだろ？と、問いただすと、倉守は何時だって気合を入れ直す。

強くないと貴方は死にますよと死刑宣告でもされてるようであつた怖い。

いや違う。倉守は怖い。

行動原理が全く理解できない。

単純に強くなりたいと思っていたのなら、もっと知識を蓄えてたりしててもおかしくないはずなのに、倉守は魔法に関する知識がとことん欠けている。

俺には倉守が魔法に興味無いように見える。

魔法に興味が無いけど魔法高校に入学する奴なんて、俺の知ってる限りだと、樹里の和音である風間ぐらいだろつ。

彼女の場合はかなり例外的だ。魔法使いの名家であるから体面上しようになく通っているだけにすぎない。

彼女の意志はそこに介入してないのだ。

対して倉守は自分からこの道を選んでいる。

「なあそう言えばお前は何で魔法使いとして強くなりたいんだ」

「……どーでもいいじゃん」

倉守は視線をそらした。

言えない理由。

それは俺が信賴されてないからなのだろうか？

まあきつと何時か話してくれるだろう。

それよりも今はもつと大事な事がある。

「解った。5キロで走ろう」

「あたし強くなりたいから頑張つて7キロ走るよ」

「もちろん走つて貰いたいけど、ちよつと嫌な事思い出してね。そろそろテスト対策しないと不味い」

「テストつてけっこう先じゃないの？」

今は6月の中旬。確かにテストの一週間前から頑張るタイプには少々早いだろう。

そう普通の学校なら

「筆記試験は7月前にやる。7月からは実技の試験が入る。実技のテストは三週間連続での試合だ。一日一回合計で15戦やるぞ」

「マジで！？ そんな早いの！？ 氷河はそんな事言つてなかったのに！？」

「そりゃ、あいつはテスト勉強なんてしないからな。しなくても点数取れる」

「それにしても実技の試験回数多くない？」

この学校に入ってきてそんな事を言うのはきつと倉守だけだろう。魔法高校の実技試験は全国で放送されている。成績上位陣の戦いはプロのウィザードと比較しても引けを一切取らない。そんなプロレベルの試合を毎日長時間見ることが出来るのでウィザードファンならばこの時期を忘れるはずが無い。

そう忘れるどころか知らないはず無いんだよ。この学校に来るよな奴だつたら……

ホント、どうして魔法使いになりたがるんだか。

「とりあえず、実技のテストに関しては今学期はあきらめてる。たぶん五勝も出来たら良い方だ」

「模擬戦は結構成績良かったのにどうして控えめなの？」

倉守暗殺の後にも模擬戦は何度か行われた。俺たち楽団^{バンド}の成績は四勝二敗。確かに悪くない成績だ。

「ルールが違う。ドールマスター戦じゃなくてスタンダード戦。よ
うするに楽団^{バンド}二人ともがリングの上にいるルールだ」

どう考えても相手は倉守を率先して狙ってくる。どちらが入力^{イン}出力^{アウト}をするにしてもかなり苦戦を強いられる。

「そ、そっか」

「だから実技で取れない分を筆記の方で稼いでおかないとかなり不
味い」

まさか俺がこの心配をする事が来るとは思っていなかった。

「最悪退学になる」

殺すのも殺されるのも日常茶飯事な魔法高校ではあるが、別に学
校側だってそれを望んでいるわけではない。

その証拠の一つとしてあげられるのが、退学させるラインが異様
に高いことだ。

他の魔法学校なら成績が少し低い程度の扱いで済むような事でも
ここでは命取り、魔法を使う才能が無いのなら、死ぬ前に帰って貰
うのがこの学校の嗜み。

そんなありがたいのがあるかたくないのか全然解らない制度だ。
個人的に言わせて貰えば、退学を阻止するために人殺しへと拍車
がかかるシステムであるとも思う。

まあ実技が駄目でも平常点と筆記の方の試験点を取っておけば、
そこまで気にする物ではない。

さすがに十五戦十五敗をするのは難しいからね。

「倉守大丈夫か？　ちよつと顔色が悪いように思えるぞ」

いや、顔色が悪いというか死んでるというか。

「なあ倉守、最近は受業聞いてるよな」

こくこくと顔を上下に倉守は振った。

「確かに最初の頃寝てたから、平常点は悪いと思うが、テストでき

「つちり——」

「ここまで言って俺はどういう事態になっているのかにようやく気づいた。」

「もしかして受業全然解ってなかった？」

「うん……」

もつと早くに気づいていてもおかしくなかった事態なのに。

倉守は魔法に興味が無い。それはつまり本来この学校に来るような生徒だったら知っていて当たり前のような知識が無いと言ったこと。それが受業そのものにだって当てはまると言うこと。

そして倉守は序盤の授業をずっと寝ていたと言ったこと。

本来、一年生に成ったばかりの受業はさほど難しくはない。しかしそれは魔法に興味があればの話だ。

「どうしてそう言うことをちゃんとやってくれないんだよ！」

「テスト前に一夜漬けしておけば、赤点ギリギリぐらいの点数は取れるって思ってたの！ あたしって退学なの！？」

俺はその疑問に答えることが出来なかった。

1 学期期末試験 美海VS樹里編2

俺と一緒にトレーニングをすると約束したし、それを守ってるし、今後も続けていこうとも思ってる。

しかしだ。

それは魔法使いとしての実践的なトレーニングの話であって、勉強の話ではない。

「そこを何とか」

手のひらを合わせて頼み込まれた。

勉強を教えて上げられるぐらいの成績はあるし、今からテスト勉強をするなら満点とはいかなくても赤点を回避するぐらいならできるだろうけど、

俺としては問題が一つある。

教えなければ赤点で退学して、樹里が和音コードになるのでは？

頑張ってる相手を殺すのはやりたいとは思わないが、今までの怠惰のツケが回ってきて勝手に退学になるのまで面倒を見る必要がどこにあるのだろうか？

とは言っても、見殺しつてもまた違うな。

「友達に教えて貰ったらどうだ？」

まあ勉強なんてきちんと量をこなせば出来るのだ。俺が教えてやる必要はない。

「……嫌」

「どうして？」

「……」

俺は倉守を見る。倉守は俺から逃げるように視線をそらす。ぼそつと口が動いた。

「あたし…… あんた以外に友達いないし……」

そう言えば前にぶつちやけてたな友達いないって、でもそれは秘密の特訓をして、授業中寝てたからってのが理由じゃないのか？

あれから一ヶ月だぜ？

「喋るの苦手……」

「そう言えば言ってたな」

俺としてはそれも理由には入らないと思うけど。個々人の感覚にまで口だしてはいつまで経ってもきりがないか。

「解ったよ。俺がお前の友達を呼んでやるよ」

「だからいねーって」

「それ聞いたら悲しむだろうな」

俺は携帯電話を手を取った。

「と言うわけで、樹里先生をお呼びしました」

たぶん友達と言っても良いと思う。倉守がどう思うが俺の知った事じゃないが、樹里なら友達と言ってくれるだろう。それに成績もかなり良い。そう言うわけで、俺と倉守の部屋で勉強会をするから来いと呼んだのだ。

「みんなで勉強会するのって初めてだから楽しみ」

「そっぴゃ、風間はどうした？」

良かったら風間も呼んでくれ。と俺は頼んでいたのだけど。

「風間ちゃんはまだ私のミルちゃんに乗って失踪中です……」

ミルちゃんは樹里の使ってる筈の名前だ。筈の名称ミルキーウェイから取ってる。

「一応メールしたので、来るかも知れませんが期待しないでくださいね」

樹里はそう言うって持ってきた教科書の類を机に広げた。

「なあ」

倉守は俺に耳打ちする。

「ん？」

「氷河はあんたの頼みだからあたし勉強教えてるんであって、あた

しを友達だと思って教えてくれる訳じゃないだろう？」

「お前には樹里が淑やかな奴に見えると思うだろうが、あいつは嫌なときはきちんと嫌と否定するから安心しろ」

倉守は納得してなさそうな顔をしていた。

成績上位者が二人もいるなら勉強するのも楽だろう。

と言う俺の憶測はあまりにも樂觀的な事がすぐに判明した。

「えーっとそこは何となくで」

「数学で何となくなんて言われても……」

樹里は教えるのが絶望的にヘタだった。

さきほどからずっとこの調子である。基本的に答えを一瞬で導き出すのだが、その答えを導き出すまでの過程を一切説明できない。

樹里の感覚だと歩くのを教えるのも、数学を教えるのも大して変わらないのかも知れない。

「じゃあこっちの問題は？」

「ここに補助線引いたら答え出るよ」

「そこに補助線を引くまでの過程は？」

「なんとなく」

そう言えば、俺は樹里が家で勉強をしているところを見たことが無い。俺が予習している隣で、平然とレースゲームとかよくやってたよな。

俺が教えるべき何だろうけど、なぜか樹里はノリノリで教えてるから止めるのも憚られる。

倉守そんな顔で睨むなよ！

「みみちゃんどうしたの？」

「べつに……」

「あたし、火野の奴から数学教わりたいなあ……」

「ダメ」

「ひの——」

「私が教えるよ」

樹里は笑顔を作る。微妙に顔を傾けてその傾きにそって髪の毛が綺麗になびく。

それと同じように倉守は樹里になびくしかなかった。

問題点がそれだけならば、明日から樹里を呼ばなければどうにかなったのだろう。

「これ全部暗記するの？」

倉守の声が死んだ。

「そうだよ？」

樹里は何で？って疑問符を頭に浮かべる。

数学に関しては倉守は被害者だと思っただが、今回のに関しては俺は樹里の味方だ。

数学の教え方がダメなら数学以外の教科を教えて貰おうと言うのまでは良かった。教えて貰うのも樹里の専門分野である魔法実技なのも理に適ってる。

問題はその量だった。

「氷河はいつ頃覚えたの？」

「七歳の時には全属性の効果の序列も覚えてたよ」

俺もそれぐらいには属性の配列を覚えていた記憶がある。

実技魔法はとにかく量が多いらしい。

一般的な生徒は魔法に興味があるなり、魔法に触れるタイミングが多いので、覚えると言うよりはいつの間にか記憶してしまうような物だ。

だから、量が多いと思うことすら無かった。

「じゃあ、魔法道具破壊の優劣は？」

「一位が光、二位が木、それ以外の属性は魔法道具の破壊が一切出来ない」

「火と木の体内魔法の効果は両方共に身体強化であるがその違いは

？」

「火は筋肉量の増強で、木は筋肉量、反射神経、自然治癒の複合」
「では木の体内魔法と同じ効果を他の属性で作ろうとしたとき、どの属性をあわせればいいでしょうか」

「火と雷と水に、火と水が相反属性なので火と水の中和属性である土も加える。ただし全部を複合せずに独奏魔法として使うのならば土属性は要らない」

「……なんでこんなのすらすらいえんのよ」

A・すらすら言えるような状況じゃないと戦いにならないから。つまり必死になって暗記するような物ではなくて、戦闘によつて培つていく物が実技魔法のテストで問われるのだ。

「大丈夫だよ単独の独奏魔法と二つの組み合わせの重奏魔法だけならそんなに難しくないよ」

ただしそこに遅延魔法の発動条件と、全属性の独奏魔法と重奏魔法の体内魔法、体外魔法の効果、同一の事が出来る属性の優劣の順序、各属性の中和属性、補強属性、相反属性の暗記も必要になってくる。

これぐらいのこと、魔法使いでなくてもウィザード好きを称する人間ならば、知つててもおかしくないレベルの事であつて、学園側もそれを理解して一年生に優しくするつもりで出題してるのだから。

もつとも、その優しさが届いていない一年生が目の前にいるけど。

倉守が要点をノートにまとめ初めて三十分がたつた頃、そろそろ夕飯時だ。昔はお互いに別々の物を食べていたが、今では俺がまとめて作ることになっている。倉守が殺人料理の使い手であつたりとか、俺が家庭的な男だつたりするわけでもない。

俺がジャンケンに負けたからだ。

さて何を作るうかと冷蔵庫を開けた時、チャイムが鳴った。

俺は通販で買ったアニメのBDだと勝手に判断して扉を開いた。

そこにいたのは活発そうな少女であった。

「夕飯食べに来たぜ！」

風間恋愛だった。風間は表情豊かでテンション高めの女の子で、単純明快ストリートな性格をしている。ちよっとたれ気味の瞳をしており、シヨートにまとめた髪をおでこに掛からないようにヘアピンで留めている。

こう書くところにもいそうな少女に見えるが、倉守の和音^{コード}と言っただけで、そんじょそこらにいるわけがない。

事実、彼女は風間魔法工業社長令嬢だ。

風間恋愛は間の抜けた笑顔をしながら、返事を待たずに勝手に上がってきた。

「あたしの盗むようなおやつもないし、自分で作るのも面倒だし、勉強会つてのも楽しそうに見えたから来ちゃったぜ」

「別に盗ませるためじゃないのに」

「でも食べ物って食べられるためにあるんだから、あたしが食べても良くな？」

「ぜんぜんよくない！」

「でも箸って乗られる為に——」

「何で私のミルちゃんに乗りたがるの!？」

なお、樹里愛用の箸ミルキーウェイは風間魔法工業製だ。

「あたし夕飯はカレーが良いなカレーが」

勝手を知った我が家のようにレンアイはテレビを点ける。これで日本有数企業社長の末娘なのだから恐れ入る。

「解ったよ力……レンアイちゃんシチューだな」

材料的にも出来るので俺はレンアイの要求をのむことにした。

「だから、あたしを名前でごぶんじゃねーって！ あたしを呼ぶときは風間ちゃんにしろと言っただろ」

確かに恋愛ちゃんって名前を好きになるのは難しいだろうな。本人にあるのは恋愛ではなくて、憐哀だ。

「それで風間も勉強に来たんだろ？」

その割には勉強道具を一切持ってきてるようには見えなかった。
「もちろん」

風間は黄色のポシエットからディスクケースを取り出して、俺の顔面に見せつける。

「マリオパーティーしようよマリオパーティー！」

「桃鉄じゃなくて？」

樹里は頻繁に桃鉄勝負を挑まれるとか俺に話していたのだが。

「時代はマリオパーティーだね」

そんな事をかしまった表情で言われても、俺としては対応に困る。と言うか俺にコントローラー渡されても困る。

俺だって困惑しているけれど、この状況を黙って見過ごせないのは俺ではない。

「風間、あたし勉強中なの、ちょっと黙ってて」

倉守だ。倉守は不機嫌さを隠そうともせずに、言葉に力を込めていた。

「おいおい、勉強会で人が集まってるのに、勉強するなんてバカのことだぞ？ それにテストまで時間あるしさあ。ここは全力で遊ぶべきだと思うよあたしや」

「あたしはそのバカだからしないと本当に不味いのよ」

「はいはいお互いにそこまで。樹里シチューを作ってくれ、倉守は寝室の方に行っててくれ、風間お前の相手は俺だ」

俺は風間からコントローラーを受け取る。倉守に勉強しやすい環境を整える為には誰か一人が風間とのゲーム勝負を受けなければならぬ。
らない。

決して俺がやりたい訳ではない。

みんなで夕食を食べゲームをして遊ぶ。どこにでもある日常的な光景だ。テスト前であることを除けばな。

この日以降も倉守はテスト勉強に励んではいたし、徐々に風間は協力的に、樹里も協力的に（あるいは非協力的にと言う表現でもあってはいる）なっていた。

倉守に勉強を教える役割は消去法で俺になった。倉守から見れば俺は俺で説明が多すぎて解らん。との事だが、説明が無くて解らないのと、説明する気すら無いのではさすがに選択する余地は無い。今までの遅れを取り戻すために、夜遅くまで勉強に励んだ。

生活リズムはまた微妙に乱れていくが、しょうがない物と俺はあきらめてしまった。

それがいけなかった。

試験初日。倉守は風邪を引いた。

「別にこんなの風邪に入らないし」

と鼻声で喋る人間の言うことを一体どれだけの人が信じるだろうか？

「風邪薬飲んでおけ」

俺はふらつく倉守を椅子に座らせ、体温計で熱を測らせた。

これに関しては俺の失態だ。コーチだの何だのと言っておきながら、初歩で重要な体調管理が出来ないだなんて。

「魔法でどうにかならねえ？」

「風邪は無理だ。」

魔法にはふれられない部分も多い。風邪はその代表的な例だ。

「カンニングは？」

「テスト中は結合指輪リンクリングの着用禁止だ」

魔法を使つてのカンニングは難しいが、古典的なカンニングは不

可能と言い切れる。教師達は一流の魔法使いぞろいだ。易々と見抜くだろう。

「じゃあぼーつとするのだけでもどうにかならない」

「……それは出来るかも知れない」

水属性の体内魔法に精神を落ち着かせると言うのがある。逆に心を弄るのはそれぐらいしか存在しない。他の精神や記憶を弄るには、禁忌属性の心属性が必須になる。

「テスト直前に樹里に頼んで掛けて貰うから安心しろ」

「わかった」

体温計の音がなった。俺は倉守から奪い取る。倉守なら一度や二度ぐらい詐称してあたしは元気なんだから病人あつかいすんな。と言いつい出しかねない。

体温計で示された温度は38度9分だった。

倉守是最悪のコンディションの中でも必死に問題を解いた。家に帰ると、そのまま布団に飛び込み、テスト問題の復習などできる様子ではない。

俺は倉守を医者連れて行ったり、部屋の掃除などの分担部分の作業も行った。俺だけではどうしようもない部分は樹里と風間の手を借りた。

倉守に体を休める時間を作って上げたかったからだ。

親の心子知らずと言う言葉があるが、まさにそんな状況だった。

俺の作った時間で倉守がやった事と言えば、

新たなテスト対策だった。

テスト最終日、テスト終了後俺は倉守と一緒にパソコンの画面を見つめていた。

倉守の風邪はようやく治りかけたが、一度受けてしまったテストの点は取り戻すことが出来ない。

自己採点の結果はあまり芳しいとは言えない。赤点のラインを超

えてはいるが、依然として退学は口を大きく開いて待っている。

そこから逃げ出せるかどうかはこれからの実技試験の対戦相手によって決まると言って良かった。俺の推測する限りだと、八勝七敗。ここが倉守にかせられたボーダーラインだ。

俺は懇親の力を込めてマウスをクリックした。テキストからテキストへページが飛んでいく。俺はそのリストに並ぶ名前を一つ一つ確認していく、対戦相手の合奏、^{バンド}勝てるかどうかの憶測もたてた。

俺の予想は七勝七敗だった。

どうにか成るかも知れない。

俺は希望を持ちながらマウスをスクロールした。

実技テスト最終日俺たちが戦う最後の楽団は、^{バンド}

氷河樹里と風間恋愛の二人だった。

予想される俺と倉守の成績は七勝八敗。

奇跡が必要だと突きつけられた瞬間だった。

1 学期期末試験 美海VS樹里編2（後書き）

この章は大きく書き直すかも知れません。
（色々はしよりすぎた）

1 学期期末試験 美海VS樹里編3

俺は落胆のため息を吐いた。

「でも追加で一勝ぐらいならどうにかならない？」

対して退学がほぼ確定になった倉守はあっけらかんとしていた。

「現実的な見方をするとなら4勝11敗ぐらいの所を、かなりひいき目で見て7勝8敗だ」

倉守が苦虫をかみ潰したような顔になる。ようやく事態を理解したらしい。

「あたしは絶対退学なんてしないから」

「俺だって、お前をそのまんま退学させる気は無い」
ここまで来たら最後まであらがってみせるさ。

魔法高校の期末試験は少々歪な形をしている。

単純に実力を測りたいのなら、事前に組み合わせを十五組作るのではなく、模擬戦の勝率を元に最初の相手を決めた後は、勝率で判断していく方が強さの順序が解っていくだろう。

もちろん学校側だってそれぐらい認識済みだろう。

では何故こんな変則的な方法をとるのかと言えば、
賭博の対象だからだ。

世界中に配信されると共に、賭の対象にもなっている。そのため
事前に人気が出そうな組み合わせを意図的に作っているのだ。

十五戦目の樹里と風間の楽団も俺と樹里が元々楽団で無敵の強さを誇っていたからだろう。

氷河のストーム

火野の異端児

の直接対決。

倉守の退学が掛かっていたらなかったら俺と樹里も喜んで戦っている所だ。

しかし樹里だつてこの状況を知っている以上。複雑な心境だろう。
「氷河に勝ち譲つて貰うつてできない？」

「八百長がばれたら四人共に退学になるし、俺が認めない。もう模擬戦のような事をするのはごめんだ」

それに今回の事にこれ以上倉守と風間を巻き込むのは気が引ける。
俺と倉守は楽団^{バンド}で一蓮托生な関係だけど、樹里と風間は関係が無い。
「じゃあどうすんのよ？」

「正攻法で駄目なら搦め手で行くしかない」

「賭博なんてしてる余裕ないでしょ」

「賭博しに来たわけじゃないぞ」

俺たちは魔法特区内で一番有名なブックメーカーの販売所に来ていた。店内には複数の大型液晶テレビに飲食物の販売もしており、純粋にウィザードの観戦だけを楽しむことも出来る。

今日から賭けが開始なので、店内は人で賑わっている。

誰に賭博するか悩んでいる青年、賭博なんて関係なしに食事をしている女子二人組、俺の試合に賭けに来たからなのか俺に手を振ってくる大学生の姿などがあつた。

俺の探している男は賑わつてる店内の中でも一際人の集まる場所の中心にいた。

予想屋だ。勝敗の予想や、注目されている選手の情報を買ったり出来る。

魔法特区内においては、いくらかの上納金と審査を通り抜けると合法的に出来る職業らしい。

俺が近づくと予想屋の男の方から話しかけてきた。

「やあ火野の旦那何か入り用で？」

「俺が期末試験で戦う楽団^{バンド}全員分のデータが欲しい」

一部の生徒、例えば樹里なんかは別に買わなくても模擬戦で見て

いるから知っているのだけれど、ここまで来ると一人二人減ったところで値段も変わらないだろ。

「金額がシャレになりませんよ？」

「シャレでこんな事を言う人間に見えるのか？」

予想屋は豪快に笑う。間違ったことをしてるみたいで不快だ。

「いやいやいや、中々スゲーぜ。戦ってるのを見てる限りだとじみーな感じに見えたけど、やるときはやるな。良いよ。ただで、全部調べてやる」

「本当にタダでいいのか？」

俺は高校生一ヶ月のバイト代が全部吹っ飛ぶぐらいの金額を予想していたのだが。

「別にタダでいいさ。こっちはこっちで貴重な情報をいただいた訳だからな」

なるほど。俺が他の生徒の情報を必死になつて集めていると言うことも情報になるのか、自分がある程度有名だから出来る裏技みたいな物か。

一挙一動がそうやって売買されているのはあまり良い気分ではないけど、そうも言つてられないか。

しかし、これはむしろチャンスだよな？

「ところで、リンクリング結合指輪をオーダーメイドで作りたいのだけど、どこか良い店か生徒を知らないだろうか？」

リンクリング結合指輪は学校側から配布されている基本的な物以外も使用が認められている。例えば、炎属性を伝達するのに特化した指輪なんたのを使つても良い。

「リンクリングどんな結合指輪」

「炎属性に特化した指輪が欲しい」

「それなら良い店を知ってますよ。お代はいりませんって、これぐらいサービスサービス。だからごひいきよろしく」

情報屋がニタツと笑うのを確認した。

これで、倉守の炎属性で戦つと憶測をたてるはずだ。

じゃあ帰るかな。と俺があたりを見回すと、倉守は受付で少々もめていた。

「何してるんだよお前」

「ぜってーに負けないって気合いを入れるために自分の試合を買おうとしたら」

「試合の関係者はご購入になれません」

受付嬢は苦笑いをしていた。

俺はブックメーカーで倉守と別れた後に、情報屋に教えられた店で炎属性特化型の結合指輪^{リンクリング}を二つ購入した。

二つと言うのがポイントだ。

一つは普通に使わせて貰う。倉守が今後他の属性を使えるようになったとしても、炎属性が一番強い属性であるのは変わらない以上、炎属性を中心とした戦略を立てていくしかない。

もう一つは特長の無いの結合指輪^{リンクリング}として使えるように細工する。
アイディファクト魔法道具の製造は俺の専門分野外だが、樹里に協力してもらえばこれぐらいは可能だ。

こうすれば、一回限定の入力出力^{インアウト}の奇襲的入れ替えが可能だ。

さらに俺はスーパ^{アイディファクト}ーで包丁も購入した。

期末試験では魔法道具で無い道具の持ち込みは認可されている。

と言っても、手に持てる範囲限定と言う注釈もあるし、持ち込むような生徒はあまり居ない。

なぜそんなルールがあるのかと言えば、風属性を使う生徒が、魔法で操る物を持参してくる為だ。

俺も風属性と水属性が強い樹里の和音^{コード}をしていたので解るが、風単体で強力な攻撃を出来るようになるには、かなりの熟練が必要になる。俺もそこまでの実力は無いので、水の中に研磨剤を入れてウォーターカッターのようにして使っていた。

もし倉守が包丁を持ってリングに上がってくれれば、相手は自分の身を守るために包丁を握ってくれたと勘違いしてくれるだろう。

そこで火属性特化の結合指輪リンクリングを細工して作った通常の結合指輪リンクリングを使って入れ替える。

1回だけならこれで勝利できるはずだ。

後は相手の情報を見て個別に対策を取りながら、倉守が劇的に成長してくれるのを祈るしかない。

1 学期期末試験 美海VS樹里編4（美海視点）（前書き）

書き分け出来ているとは思っていますが、一応サブタイトルに誰の視点を表記しました。

1学期期末試験 美海VS樹里編4（美海視点）

「あたしまだがんばれた」

だって、今が実質最後の試合だったし。

「左手足を物理的にもぎ取られた状態で言われても説得力ねえからな」

あたしは今治療室で腕と足の接着作業をしているところだ。肘と膝の先が無くなっていて、見ているだけで痛々しい。

どんな助かりそうに見えない傷でも、何事も無かったかのように治しちまうから魔法つてすげえ。今だって本来なら喋れる余裕なんて無いほど痛いはずなのに、あたしはかゆみ一つ感じてない。

魔法によって受けた傷の場合は傷の切断面に魔法痕が生じて——
なんてむずかしいことを火野は前に言ってたけど、要するに魔法による傷は魔法で簡単に治せるってことらしい。

「大体お前が死んだら意味ねえだろ」

「あれぐらいじゃ死なねえって」

「ここ数日で傷に対してのモラルって言うか、感覚が著しく低下してるみたいだから言うておくが首が飛んだらさすがに治せないからな。確かに、死してもなお勝利つてなら、あの後、魔法生物が首に食らいついてくるハズだから入力出力を逆転させて、お前が魔法生物を魔法でぶっ飛ばしてる合間に俺が本体の方をぶん殴ればいいはずだ。ただしお前は治療を受ける前に死ぬ」

こいつの言うことだからたぶんホントなんだろうってのは解るけどあたしは納得できない。

だって、次の試合相手は、

「樹里と風間の事なら、俺がどうにかする」

あたしの思考を読み取ったかのように火野は喋った。

「どうにかってどうすんの？」

「俺、明日樹里にプロポーズすることになるかも知れない」

悟りを開いたみたいにすがすがしい顔してる。

氷河は恥ずかしがり屋だから、みんなの前でしかも大人数が見てる試合でプロポーズなんてしたらぜってー恥ずかしがるだろーけど。その手段って失敗したんじゃないの？」

これから対樹里戦の必殺をやる。俺の知将ぶりを見る！ と言った矢先にやったことが『樹里綺麗だね』って氷河に言うことだった。何やってんのよバカップル。

氷河は氷河で、『髪は乙女の命ですから綺麗なのは当然だよ』と華麗に流してたし。

「始業式の時はずまくいったのに……もっとインパクトのでかい一言なら」

「嫌いだーって言えば？」

「……言えないよ。例え冗談でも」

どこか遠くを見るように、懐かしむように火野は言った。

昔喧嘩でもしたのだとあたしは考える事にした。

「とにかくだ。樹里を五秒ほど止めることが出来るなら勝てる」

「何で普通にやって勝てないのに五秒だけ止められれば勝てるって自信満々に言えるの？」

「俺と樹里が何年間幼なじみやってると思う？ 弱点なんて予想屋に聞くまでもなく把握してる」

「そだねー。知将さんに戦略を全部まかせてあたしはトレーニングするよ」

監督官に動かしてみてと言われたのであたしは繋がれた手と足を動かしてみる。

これがちよつと前まであたしから外れていて、血まみれになっていたのが信じられないほどよく動く。

「無理すんなよ」

「無理なんかしてねーし」

あたしは火野に背を向けて治療室を後にした。

あたしはこの学校に入って良かったなと素直に思える物がほとんど無い。

魔法は今だって嫌いだし、いまいちクラスになじめないし、火野の奴も……まあころそーとしてきたけど、トレーニング付き合ってくれるし、看病してくれたし、最初に威圧的に接したことはあたしも後悔してる。

うん。嫌いじゃないかな。

でも、同居してるのに女として一切見られないのは紳士的なのか、あたしに女としての魅力が無いのか。………複雑。いいや、氷河一筋って事にしておこ。（それもなんか違う気がするのはなぜ？）嫌いなことをあげるだけなら三時間ぶつとおして話したってきつと尽きないと思うけど、好きなことはたった一つしか無い。走ること。

これだけは楽しいとあたしは胸を張れる。

最初はつまんなかったし、今でも走っててつらくなる瞬間があるけど、走り終わった後のタイムを見るのが好き、そのタイムが縮まっていくのが好き、くたくたになってるけど体に満ちる充実感が好き。

とにかく楽しくてしょうがない。

あたしはイヤホンを耳に掛けてミュージックプレイヤー（火野からおふるを貰った）で音楽を流しながらいつものコースを走り始める。

耳に流れ込む音楽はあたしの暗く沈み込んだ気持ちを持ち上げてくれない。ランニングの疲れはあたしを無意識に運んでくれない。

7勝7敗。

次の試合であたしの退学が決まる。

風邪を引いたときに何度も悪夢で見た光景が、現実の物になってしまう。

悪夢のバリエーションはいくらかあったけど、最後にはお兄ちゃんが出てきて――。

あたしは看病されていた時の事を思い出しながら走り始める。

あたしは風邪を引いてるときに眠りたくなかった。

弱いあたしなんて見せたくない。

起きたらあたしは泣いていて、あいつは本気で心配する。

「お前は病人なんだから寝るのが仕事だ！ テストはその後だ」

病院に連れて行かれた後、火野はあたしを強引に布団に寝かしつけて、冷却シートをあたしのおでこに貼った。

「テスト勉強しないと退学しちゃうじゃん」

嘘だった。眠りたくなかった。夢を見たくなかった。

「俺がお前を絶対に退学させない。しかしお前の風邪まで俺は治せん。だから大人しく寝てろ」

「移せば治るかも」

「軽口叩けるぐらいだ移さなくても余裕だな。だからお前は何も気にせず寝ている」

「…………あたしみたいなバカ、退学するに決まってるんだからあきらめれば」

「風邪引いてる奴がバカな訳ないだろ？ それに、お前がバカだったとしても、火野一族でも歴代最強の火野昇君コードの和音は何の不手際か無能でしたなんて語られたくないんだよ。お前には最強とは言わねくても、二つ名貰えるぐらいには強くなって貰う」

「ころそーとしたくせに」

「方針転換だ！だからお前が退学したかったとしても俺は絶対にさせないから、覚悟しろ」

「へいへい」

「とりあえず俺に着替えさせられるのは不服だろうから樹里はさつき呼んだ。今のところ何かして欲しいことあるか？」

して欲しいこと……あたしはぼんやりとした思考で考える。

「……体拭いて欲しい」

火野がすげー驚いてた。驚き方が氷河に似ていて、ちよつと笑えた。

そしてあたしはどうして火野が驚いたのかをようやく理解した。

この状況だと、火野があたしの体を拭くことになるじゃん。

そこまで頭が回らなかった。ただ、すっげー汗かいてるからどうにかしたいなーって思ったただけなのに。

「お、お前!？」

「やってくれるんじゃないの？」

普段のあたしなら上手くかわせたんだろうけど、まずこんな事を言っちゃうような頭がかわせるわけが無い。

おかげでお互いに引つ込むわけにはいかなくなってしまった。

あたしはあいつに見られないように、制服のブレザーを脱いで、ブラを外した。

背中に適温のタオルが当たる。

それがすーっと上から下に流れていく。意外とうまい。

思考どころか羞恥心まで麻痺してたからそんなに恥ずかしくなかった。

ただ、

「チャイム押しても反応が無いから、勝手におじやまさせて貰いましたけど、ノボルは何をしてるのかな？」

あたしの体を拭いてる場面を見られて、天使のような笑顔をしている氷河に連れ出されたから、火野には悪いことをしたと思う。

あたしは氷河に手伝って貰ってパジャマに着替えさせられれるがままに看病された。（ヘタするとあたしも火野みたいになれそうだし）

「ねえ悪夢を見た時ってどうしてる」

あたしを看病し尽くして満足している氷河に聞いてしまった。

「ほっとする。だって現実じゃないでしょ？ 現実だったらノボルがきつと助けてくれるから」

「ふーん」

まさかこの話で惚気られるとは思わなかった。

火野が助けるのは、それが氷河だからなんだとあたしは思う。今のあたしを助けようとしてくれるのも結局自分の名声のためだし、きつと名声とか関係なく、あたしがピンチになっても助けてくれねーんだろうな。

だってあいつ結局の所は氷河の王子様だし、氷河は典型的なお姫様みたいな女の子だし。

氷河に比べたらあたしなんてそこらにいる村娘だ。

それに王子様は――

「体調が悪いときは悪夢って見やすいと思います。でも、それは現実じゃないのですから、それに私もノボルもそばにいるから、だから安心して眠って欲しいな」

「へーい」

その時だけは夢を見ることなく、眠れたと思う。

ランニングしていても合間も思考がぐるぐるとループする。しか

も徐々に悪い方へ悪い方へと流されていく。

悪夢の事を考えて、風邪を引いたときの事を考えて、試験の事を考えて、退学の事を考えて――

試験の結果は全部あたしのせいだ。

結局あたしがこの十四試合でやったことと言えば、眼鏡からコンタクトに変えたこと（戦闘中に眼鏡を落とすと致命的だから）、包丁で牽制したこと、いつもと同じ内容のトレーニング。

負けた理由を突き詰めるとほとんどあたしが原因だし。

火野のやった小細工も何度か成功してるし、なんだかんだ言っであいつ最強を自称してるだけあるんだよな。

……退学、しょうがないかも。

あたしには過ぎた野望だったんだ。

復讐なんて。

あたしは折り返し地点に来たここに来ると気分が盛り上がる。うおーって叫びたくなる。叫ばないけど。恥ずかしいから。

「やあ倉守美海さん」

「うお！」

叫ぶつもりは全然無かったけど、叫ぶことになってしまった。だっていきなり後ろから肩叩かれたら驚くでしょ？

「驚かせてすまない。音楽を聴いているみたいだから直接触らないと解らないかも知れないと思ったのだが、面目ない。最近の女の子にしてみればこれもセクハラの範疇なのかも知れないね。ボクとした事が失態だ。しかもつまらない失態だ」

氷河氷柱先生だ。火野が言うには関わっちゃいけない奴。氷河が

言うには面白いおじさん。あたしにとっては他のクラスの先生。

「なんですか？」

肩を叩かれたとかそんなの関係なく、ランニングの邪魔をされるのがすっぱー不愉快。

「そんな怖そうな顔をしないでくれ」

「解りました。で、何のようですか？」

「明日の試合勝ちたいとは思わないかね？」

「勝てるならね」

「なら氷河に伝わる精神直結と呼ばれる特訓法をやってみないか？」

特殊な結合指輪リンクリングを使って自らの心象風景に入り込み、転調回路をアンプリファイアー

改善する物だ。短期間で驚くほど強くなれる。と言っても実力的に樹里や恋愛に並ぶわけじゃない。それでも一瞬の隙を作るぐらいなら出来るだろう。火野君ならその隙を突いて一方的に不利な試合をイーブンぐらいには持つて行ける」

「遠慮します」

「そりゃ勝ちたいけどさ。」

「何で氷河のおじさんがあたしの味方すんのさ」

教師なんだしこういうときは公平に接するんじゃない？ それが出来なくても、肩入れするなら姪っ子でしょ？ どう考えてもおかしい。

「なるほど疑ってるのか。確かに胡散臭い話にしか聞こえないだろうね。まず樹里に肩入れする為に君を罠にはめようと思ってるのなら、それはあり得ない。」

考えてみた前、そんな事しなくても樹里が勝つのは一目瞭然下手に肩入れして、問題がでてしまった時の方がリスクが大きい。単純にボクが君に肩入れするのはそちらの方が面白いからだよ。

それに特訓イベントなんて、そう滅多に出会える物じゃない。一瞬にして強くなる弟子、少年漫画みたいでドキドキするね」

『面白さだけで行動するから厄介だ』火野はそんなこと言ってたっけ。

「……解つたやる」

今はその面白さだけで行動する理不尽さにも頼らなけりや氷河になんて勝てっこない。

「そう言ってくれると思ってたよ。でもその前に一つ確認したい。これはとても大事なことだ。」

倉守美海さん、死ぬ覚悟は出来てるかい？

氷河に伝わる特訓方法は非常に危険だね。死ぬ可能性も十二分にある。だからその事を理解してから挑んで欲しい」

「死ぬ覚悟なんてこの学校に来てる時点で出来てる」
ほんと嘘だ。

だってあたしはまだ死ねない。

まだ退学できない。

だからあたしは死なないし退学もしない。
特訓にも打ち勝つて、氷河と風間を倒す。

1学期期末試験 美海VS樹里編5

ついに倉守がカツカレーの前に敵前逃亡しやがった。

願掛けぐらいいいだろ？ 一応カツカレー、カツ丼、トンカツで微妙に変えて出してるんだし、この試合は勝ちたいって試合の時にしか出してないし、つまり大半の試合の前日に出したって事でもあるけど。

しょうがないので、俺は一人でカツカレーを食べると、倉守の分をラップして冷蔵庫の中につっこんだ。

絶対に退学させないなどと大見得を切ってしまっているけれど、現実問題かなり難しい。八百長も一応考慮に入れてみたが、全勝する気満々の風間が勝ちを譲ってくれるわけもないし、お金の力で買収できるような相手でもない。

となると、やはり樹里をどうにかしないといけないのだが……

悩みに悩んでもしょうがないので、気分転換にお風呂に入り、気分転換に一人でゲームをして、気分転換に——と、時間だけ浪費されていく。

「好きだ結婚しよう」

「好きだ——結婚しよう——」

「好きだ!!!!!!」

自分の声がICレコーダーから聞こえる。

どのイントネーションが良いかを調べるために録音して聞き直している。

言うだけでも精神が削れていくのに、それを録音して一人で聞いていると言う事実がさらに俺の精神を削り取っていく。

鳥肌がヒドイデス。

チキン肌と言わずにそのまま鳥になって国外逃亡したい。

それがダメなら焼き鳥になりたい。出来れば塩で。

駄目だ……思考が色々狂ってきてる。

思考を変えなければいけない。

別に樹里を五秒止めるだけなら、言葉じゃなくても良いはずだ。

樹里の苦手な力エルを投げつけ…どうやって力エルを確保してそれを樹里に投げつければ良いんだ？途中で風間に打ち落とされるのが落ちだ。

そうだ。樹里と風間の部屋に大量の力エルをぶちまければ、戦意喪失したり、あわよくば遅刻したりするのでは無いか？模擬戦と違って、後日再戦なんて優しいシステムなんて無いのだし。

そうか遅刻させれば良いのか！

他の対戦相手は友好関係に無かったから出来なかったが、樹里と風間が相手なら出来るはずだ。それに明日の試合は朝の十時とまだ遅刻しやすいタイミングだ。昼の一時とか三時とかは難しいが十時ならいける。

俺は「樹里の所に行く。火野昇」と書き置きして樹里の家に向かった。

事前連絡無しで樹里の所に尋ねたら風間が不審がるかと思ったが、そんなことは無くすんなり上からせて貰えた。

言い訳も一応考えてきただけに肩すかしだ。

「喰うかチーズカッカレー？あたしと樹里の分しかカツ買ってないからチーズカレーだけだ」

樹里と風間は遅めの夕食を取っている所だった。しかもメニューがほぼ一緒だ。

「遠慮するよ…食べてきたし」

まさかチーズが乗ってるか乗っていないかだけで、負けた気分になるほど落ち込んでいるとは思わなかったよ。

「てめえ！また名前で呼ぼうとしただろ！？」

「一言も言っていないどころか思ってもいなかったぞ！レンアイちゃん！」

「だから名前で呼ぶな！」

じゃあ名前を呼んで欲しそうなフリも止めて欲しい。

「それにしてもまさかこんな所で勝負を仕掛けてくるとは、あたしは思わなかったよ。ここ数週間だけで魔法使いつてか策士としての評判がウナギのぼり、いや、鯉のぼりなだけあるぜ」

まさか明日の試合を遅刻させるために、目覚まし時計の時間をずらすそうとしていることがバレてるのか？

「マリオパーティーであたしを完敗させる事によって精神的打撃を与えて翌日の試験であたしをボッコボコにするんだろ？」

そんな自信満々にコントローラーを握ってても俺はやらないからな。

「……………そんな事で精神的打撃を受けるな！！」

「でも、ノボリゆんだってチーズカッカレーを見たとき絶望してた！ モンドセレクションに受賞できそうなレベルで絶望してた！

やゝいやゝいトンカツもチーズも買えないレベルの貧乏にゝゝん！

！」

「ノボリゆんって何だよ！？ しかも絶望なんてしてねえ！」

「ねえねえ、ウナギのぼりは解るけど、評判が鯉のぼりってどういうこと？」

「めんどくさそうだからわざわざ無視したボケを一々回収しないでくれ！」

「策士ノボ太郎をボッコボコにしたあたしが詳しく解説しちゃうとだな——」

「するな！！」

仲裁でもするように俺の携帯が受信音を鳴らす。曲はアニメの主題歌だけどもまあこれぐらいならセーフだ。……セーフだね？

「乙女なあたしよりも、電話を優先するのか！？」

三次元よりも二次元の方が大事に決まってるだろ？ と思いながら俺は電話に出た。まあ電話の先も三次元だけどさ。

「やあボクだよ。君の許嫁の叔父だよ」

氷河氷柱だ。おじさんが出てくると言うことは悪いことが起きる

予兆と言うわけだけれど、すでに悪いことのまったただ中だ。

「おじさんいい大人なんですから普通に名乗って下さいよ」

「子供の心を忘れないと言って貰いたいね」

「大人に成れない子供なだけでしょ」

「楽しい会話はここまでにして、今一人かい？」

俺は樹里の所に居ると言おうとしたが、樹里は携帯の画面を見せつけてきた。

画面には「今一人って言うてね」と書かれており、樹里は作ったような綺麗な笑顔をしていた。

「……一人だけ」

「なるほど、なら気兼ねなく話せるな。倉守が生死の境をさまよってる。すぐに来てくれないか？」

「倉守に何しやがった！！！！！！」

俺が怒りをぶちまけようとしたが、携帯電話を引きはがされた。

「おじさん。一体何をしたんですか？ ……ええノボルには嘘を言ってるように頼みました。……それじゃノボルは怒らないはずですよ？ それに会話が多少漏れ聞こえてました。………本当の事を言っておしまい。………おじさん」

俺の怒りが急激に引いていく。代わりに樹里がとてもすてきなガオニナツテマス。

かざまはぬれた子犬のようにふるえながら見てました。

「次同じようなことをしたら有ること無いこと全部世間にぶちまけたあげくに、学校どころか、氷河の家からも追放させますよ？ これでも随分優しくしたつもりですよ？ だって、世間からは見放されますけど世界には止まっているんですから」

樹里は捲し立てるように言い終わると、俺に携帯電話を返した。

「………恨むぞ。とにかく、詳細はこっちに来てから言わせて貰う。大学の第三工学魔法研究棟に来てくれ。ボクはロビーにいるから来ればすぐに解るはずだ。」

「解った」

俺は携帯電話を切った。

「樹里すまないが、箒を貸してくれないか？」

「嫌です」

樹里はきっぱりと答えた。

「倉守が危ないんだよ。詳細は解らないけどとにかく行かないといけないんだ」

この時間ならまだ電車はあるけど、俺は待つなんてが出来なかった。

「だって私が乗せて行きたいから、それにおじさんにお灸を据えませんと」

「ならあたしも行きたい。ミルクィウェイなら頑張れば三人乗りいけるって！」

「ごめん。私とノボルの二人で行きたいの。それに帰りはみみちゃん乗せていかないと」

「……そっかわかった」

男である俺がバイクの形をしている箒で女の背中に抱きつくのはダサイ。俺は自分で運転すると主張したのだが、樹里は自分で運転したいと譲らなかった。

まあ樹里が運転する方が速いのは確かだけども。

その速さの理由の一つに法律無視があるのは……。

明らかに時速100キロオーバーの速度で空を飛んでました。

おかげで20分掛かる所が10分も掛からずについたので俺は見なかったことにするしか無かった。

第三工学魔法研究棟は夜の十時を回っているのに、全てのフロアに電気が灯っていた。さすが不夜城と呼ばれるだけはある。

俺たちはロビーにはいると、缶コーヒを飲んで待っている氷河氷柱が居た。

「随分と速かったね。……出来れば一人で来て欲しかった」

「それは私一人で来て欲しいと言うことでしょうか？ 難ならノボルには帰って貰いますよ」

「……いや、二人とも来てくれておじさんはとても嬉しいよ。ここで話すのも難だからちよつと来てくれ」

おじさんはそう言うと言き出した。俺たちもおじさんの後をついていく。

第三工学魔法研究棟では工学魔法の最先端技術がいくつも開発されている。そのため警備がかなり厳重で、いくつもの認証が必要になる。指紋、声紋、IDカード等々、それらの認証を何度もくぐり抜けて、地下へ地下へと潜っていく。

その合間に俺たちは倉守が今どういう状況なのかを簡易的に説明された。

『氷河に伝わる特訓を外部の人間に使わせるなんて信じられません』と樹里は怒りを通り越して呆れていた。

「ここだよ」

アーティファクト
地下四階の魔法道具特殊実験室の前でおじさんは立ち止まった。

「この中に倉守さんは居る」

おじさんはいくつかの認証を受ける。認証は無事に通ってドアは開いた。

俺はその中に入っていく。

まず目についたのは部屋の中央にある井戸だった。石造りの井戸が何故か部屋の真ん中で浮いていたのだ。

そして俺は見てしまった。

その井戸の下に倉守がいるのを。

「この部屋で擬似的に氷河の敷地にある洞窟のマナを再現している。それに月の満ち引きなどの天体的な要素が重なっている状況下で、特殊な結合指輪リンクリングをはめると、自らの心の中に入れる。そしてこの井戸が心の入り口と言うことだ」

俺には倉守が眠っているようにしか見えなかった。いつものようにすやすやと眠り、頬を指で押したら起きて怒り出してくれそうだな。本来この特訓で死ぬような事はあまり無い。

自分の心と言うのは自分に優しく出来ているから心に殺されるような事はまず無い。それに時間が経って天体の位置がずれたり、マナの配分が変わったりしてしまえば、たちまち現実に戻される。

問題は意図的にマナの配分をずらして、現実に戻そうとしているのに、一向に帰ってこないと言うことだ。

本来ならば、井戸はすでに崩壊しているし、時間的にも帰還しておかしくない。本来ならば三時間ほどで帰還するはずなのにすでに七時間経過している」

「で、俺にどうしろって言うんだよ？」

「もし君が倉守さんを助けに行きたいと言うのなら、行くことも出来る。ただし、君が行く場合は倉守さんが行く時よりも何十倍も危険だ。

自他共に認める最強の君が死んでもおかしくない。

何故かと言えば君が倉守さんにとって他人だからだ。心は自らを守るために君を殺しに来る。例えるなら数万の軍勢に単騎で飛び込むような物だと思ってくれ。

それに待ち続けていれば帰ってくる可能性もある」

「なら私が行きます」

「樹里それは無理な相談だよ。魔力の波長がある程度近くないと入ることすらままならない。それに出来るならボクが君たちに頼る前に行っている。

新しい特訓方法が見つかったる可能性があるからね。

それで火野君。君はどうする？

ボクは君に状況を提示した。強要は一切しない。ここで倉守さんを見捨てても、ボクは批難しないし誰も批難しないだろう。彼女が死ぬ覚悟を持ってこの特訓を始めたのはさきほども説明したよね」

言い終わるとおじさんは一枚の紙を取り出した。倉守の書いた念

書だった。

「ぐだぐだ言っていないで、さっさと結合指輪リンクリングをよこせ。俺が知りた
いのはどうしてこうなったかじゃない。これからどうすれば良いか
だ」

「君の割り切った所は好ましく思うよ」

おじさんは渴いた微笑をした。そして俺に結合指輪リンクリングを投げわた
「駄目！」

される前に樹里がキャッチして、それを両手でぎゅっと抱え込
だ。

「駄目！ 絶対に駄目！ ノボル死んじやうかも知れないんだよ！
？ どうしてそんな危ないことをしようとするの！？」

俺は何か気の利いた事を言おうとした。

口からは何も出なかった。

代わりに樹里の瞳からは大量の涙が流れ、嗚咽混じりで何かを訴
えようとしていた。

俺は語るのを止めた。

代わりに樹里を自分の胸元に抱き寄せた。

樹里は柔らかく暖かい。樹里の頭を撫でる。ああ確かに髪は乙女
の命だと思うよ。摩擦を感じさせずに手から流れていく。

昔のことを思い出す。

樹里は泣き虫だったっけ。ことある毎に泣いて、俺の所に来て、
こつやってひたすら泣き続けてたな。そうしたらいつの間にか元氣
になって……

俺は樹里の頭を撫で続ける。

「いやだよお」

「うん」

「わたし、のぼるがしんだら——」

「大丈夫、俺は死なない。樹里が待つてるからな」

「だったら、いけないだよ。みみちゃんかえってくるかもしれない
んだよ」

「あいつは今一人で苦しんでるかも知れない。それを助けられるのが俺一人なら、行くしかない。それに友達を放っておけない」

「いいなづけのわたしより、みみちゃんをとるの？」

「そう言う話じゃない。例え、今回助けるのがお前でも俺は躊躇しない」

「のぼるはみみちゃんをころそうとしてたのになんてたすけようとするの？」

「今は殺したいなんて思っ
てない」

「ねえ——のぼるはわたしのこ
とすきじゃないの？」

ああ好きだとも、

大好きだとも、

でも、今はそう言う話ではない。樹里にとってはそう言う話なのかも知れないけれど、違う。

親父だつたらきつと助けていたから。

例えどんなに危険でも、可能性が無くても、自業自得な話であっても、そこに一筋の光が見えてる限り絶対に諦めない。

だから俺は倉守を見捨てようとは思わない。

ごめん。

俺は心の中で謝ることにした。

なぜなら、俺はずっと封印していた言葉を使うのだから。

「樹里。結合指輪リンクリングを渡さないなら、嫌いになるよ」

樹里に子供の頃をフラッシュバックさせる言葉。俺だけが使える言葉。

胸元で抱かれています。樹里が電気でも流されたように動いた。樹里は顔を上に向ける。泣きじゃくっていて、ぼろぼろで、今にも崩れそうだった。

「やだ。やだ。きらいにならないで、おねがだからわたしのことをきらいにならないで、のぼるにきらわれたら、わたししんじやうのぼるおねがいだから、すきっていつてわたしのことをすきっていつて！きゅっってだきしめて！あたまなでて！くちにちゅー

して！」

「うん。だからその結合指輪リンクリングを渡して欲しい。」

「やだ。わたしたちらのぼるしんじゃう！」

「じゃあ嫌いになる」

「いや~~~~~~~~!!!!!!」

最低最悪の方法だ。

昔の樹里を強引にひっぱりだして、今の樹里を殺して、二択を迫る。

今死ぬのと後で死ぬのどっちがいいの？

そう聞くのとさして変わらない二択。

俺は樹里をぎゅっと抱きしめて、頭を撫でた。

「好きだよ。樹里」

そして樹里の口を塞いだ。

俺は樹里から奪った結合指輪リンクリングを指にはめた。

1 学期期末試験 美海VS樹里編 6

俺は目を開く。

下を見ると自分が眠っていた。

さらに言えば自分の体からも井戸が生えてた。

…… ホラー映画だな。

俺は感觸の無い足で倉守に近づく。倉守の井戸を覗き込む。何も見えない。

意を決して俺は樹里の井戸に飛び込んだ。

井戸の中は海だった。井戸の外から見たときは真っ暗であつたのに、井戸の中は透明な海が広がっていた。

ただし、生き物も何も存在しない水だけの海。

俺はおじさんに言われたとおりに下へ下へと泳いでいく。深まるにつれて光が届かなくなっていく。

目がくらむほどの強烈な真っ赤な光が地下から発せられる。俺はその光に導かれるように泳ぎ進む。

光はドアノブから発せられていた。俺がそのドアノブを掴むと、光は多少収まった。

俺はノブを回す。

これが倉守の心だと言うのなら、この世界が倉守だと言うのなら、俺は違つと叫びたかつた。だつて、この世界は、すでに死んでいるのだから。

世界は廃墟だった。終末戦争後のような世界。

きっとここは家だったのだらうと想像はできるけれど、そこからどんな家族が住んでいたかの想像が全く出来ない。

大半の家には屋根が無い。壁があれば良い方で、人間の代わりに人間が使っていただらう瓦礫が中を埋め尽くしている。

世界は黒と白で構成されていて、アニメのようにも思えた。

俺は自分の手を見る。黒の線と白の空白が俺だった。そこにノイズが混じり、線が乱れる瞬間があるだけだった。

生物なんて居るわけ無かった。

世界を観測する俺ですら生物と言えない。

俺は道だったモノを、今では荒波がそのまま固まってしまったような真つ黒の上を歩く、こっちが世界の中心で有ることを俺は何となく理解できてしまった。

心は自らを守るために攻撃してくるだらうとおじさんは言っていた。

そんな事はないと俺は断言できた。

心そのものが死んでいるのに、守るなんてあるのだろうか？

俺は歩いた。歩いた。歩いた。一体どれほど歩いたのか全く理解できない。

この世界に時間という概念は有るのだろうか？

ここに歩くという概念が存在するのだろうか？

そうか魔法だ。

ハーモニー

俺は一人で和声魔法を使う。時の概念は自分の時属性の魔法を使えばハッキリするのだろうが、時魔法を一切使いこなすことが出来ないの、諦めるしかない。

使用した魔法は風属性の魔法だ。

何も起こらなかった。

他にもいくつかの属性も試してみたが、何も起こらない。

……クソジジイ。

俺は歩く、たぶん歩いている。あるいは歩く言われた行動をしている。はず。

いくつもの筋肉を微妙なバランスで動かし、足を一步一步踏み出している。
はずだ。

この段階で俺は一つの間違いを犯していることに気づいた。
心は間違いなく防衛している。目に見えない形で、心そのものを
浸食するという方法で、
もしかしたら俺は両手を回すという行為を歩くと称してるのかも知れない。

あるいは魔法と言う行為と声を発する行為を間違えてるのかも知れない。いやいや、言葉そのものが浸食されている可能性だってある。

少なくとも俺の時間はこの世界のモノであるはずだ。
オレがおれであると言う保証はこの世界に存在しない。

世界に色があった。俺はそれに向かって歩く。

まるで生者の生き血を求める死者のように。

赤い色。

血のような真紅の紅。

まるで自分が子宮に帰って行くような奇妙な感覚があった。

赤は徐々に近づいてくる。

赤は扉だった。扉だけがあった。さきほどの海で見た扉のように

ドアノブが光っていた。

俺はこの先に倉守がいると確信した。

それと同事にあけてはいけないことも解っていた。

しかしその開けてはいけないという判断は倉守の判断だ。俺の判断じゃない。

俺は助けに来たのだ。そして倉守は助けられる立場にあると思う。

俺はドアを開く。

そこには祭壇があり倉守が横たわっていた。石造りの神殿には所々に火が放たれている。壁には赤と黒のアラベスク模様が変幻自在に動きながら広がっている。

俺は倉守の肩を揺する。

「帰るぞ!!」

倉守の魂はここに無かった。

俺は倉守の顔を見る。

倉守は涙を流していた。

「おにいちゃん……」

倉守は寝言を呟く。

お兄ちゃん？

倉守に兄弟がいると聞いたことが無かった。倉守の事だから聞か
れなかったから答えなかっただけなのかも知れない。

「おい！ 倉守！ お兄ちゃんがどうし——!!」

「無駄だよ。みーちゃんはここに残ることを選んだ。壁をよく見て
ごらん。それがみーちゃんの見てる夢だ」

男の声が聞こえる。

俺は男に従い壁を詳しく見る。

模様だと思っていた物は、男が女に殺される瞬間を何度もリピ
トしている物だった。

男はありとあらゆる方法で殺され、蹴られ、蹂躪されていた。

そして俺は男も女も知っていた。

男の方は三村伸吾^{みむら しんご}。

一般家庭出身でありながら、名家出身相手に勝るとも劣らない実力を誇り、たった一年間魔法高校に通っただけで、学園ランキング12位に入った事で知られる。

詳しくは知らないけれどすでに死んでしまった男だ。

女は神無月鬼姫^{かんなつき きぎ}。

名家の一つに数えられる神無月家の双子の片割れ。学園ランキング67位。

彼女を一言で語るのならば二つ名を言えば良い。虐殺の王女。

虐殺の王女はありとあらゆる方法で三村を殺す。

踏んで縛って叩いて蹴ってじらして吊す。

切って殴って蹴って刺して晒して垂らす。

まるでオモチャを投げ回して遊ぶ子供だ。

虐殺の王女なら、これが私の愛だよ。とでも表現する瞬間瞬間を

倉守は見続ける。

俺は想像する。

なぜ倉守が心の世界でこんな物を見続けるのかを。

俺は空想する。

どうして倉守は強くなることに固執していたのかを。

一つだけでは解らなくても二つそろえば解ってしまう。

倉守がこの学校に入ってきた理由は三村伸吾を殺した神無月鬼姫を殺し復讐を果たすことだ。

一つだけなら解らなくても二つそろえば疑問に思ってしまう。

どうして三村伸吾の復讐を果たそうと思うのか、三村伸吾とはどのような関係だったのか。

お兄ちゃんって呼ばれてるけど、三村は一人っ子だ。

「帰るぞ。期末試験終わってないだろ？ 退学させないって約束しただろ？」

俺は倉守をおぶろうとした。

「帰らせないぜ」

先ほどの声の主が俺の肩を掴む。

俺は男の顔を見る。

「三村伸吾？」

どうしてと思ったがここは心の世界だ。何があってもおかしくは無い。

「オレと一緒にいることを決めたからだ。

この世界は一瞬と無限が等しい。

ここならオレとみーちゃんはずっと一緒にいられる。

みーちゃんにとっての世界はオレとの関係性に集約されている。

ならばこの世界こそが現実で、それ意外は虚構だ。

世界にオレとみーちゃんだけが居れば良い」

「帰れないじゃなくて帰らないと」

「その通りだ。解ったのならさっさと帰れ。帰らないと言うのならこの場で殺す」

三村は手から炎を出す。

三村の二つ名はきりやくじゅうおう機略獣王。

多彩な戦略とアクロバティックにリングをかけずり回る二つの特長から付けられた二つ名だ。

この世界で魔法が使えていない俺と、学園トップクラスの魔法使い。

勝負はやる前から見えている。

三村に魔法が使えて、俺に魔法が使えないのは、俺が呼ばれていないからだろうか、魔法の無いあんなになんか意味が無いとでも倉守は言いたいのだろうか？

この三村も倉守の心だと言うのなら、

俺は帰るべきなのかも知れないと、

一瞬思ってしまった。

違う。

それなら最初からもつと抵抗しているはずだ。
きつと倉守は深い眠りの中で戦っている。

甘い虚構と辛い現実のどちらを選ぶべきか戦っているはずだ。
考える。

勝機をもぎ取るように、倉守をもぎ取るために今必要なのは――
三村は手に出していた炎を俺に放つ、とっさに横に飛ぶ。右足の
あつた場所が黒く焦げた。

「帰れと言っているだろ」

どうやら考える時間をくれないみたいだ。

三村は俺に一気に詰め寄ってくる。体の動きから相手の動作を読み取り右ストレートを紙一重でかわす。

おかしい。

三村はこんな戦い方をしないはずだ。

三村はさらに俺に攻撃を連打してくる。俺はそれをかわす。魔法
が使えない以上一発でも当たってしまうば致命傷だ。

マナや魔力で体をコーティングすれば、ある程度のダメージと痛みは軽減できる。しかし魔力全てを火属性の体内魔法で筋力増加する相手にどれほど意味があるのかい。

左フックに対応しきれずに俺は転んでしまう。

腹に蹴りが一発はいる。

呼吸が止まる。

声にならない声を吐く。

体ごと吹っ飛ばされ壁にまでぶつけられる。

全身を強打する。

痛みが暴れる。

三村はゆっくりと俺に近づく。

勝者の余裕という奴だろうか。いや、勝者の慢心だ。
今ので大体見えてきたのだから。

生前の三村の戦い方は風属性、木属性、光属性の三つを主軸におきつつも、相手によって臨機応変に魔法を変えていく。

少なくとも体内魔法、体外魔法、共に火属性でどうにかするバカな戦法はしない。

この戦い方は――

「弱かったな火野昇君。強いつて聞いてたのに残念だよ」

三村は火を放つ。広範囲に及ぶ

俺は癖を見破って、火が出る瞬間。火の方向を完全に掴み、体を伏せる。

そして俺は火属性の魔法を使つて一気に三村との距離を縮める。

三村がなぜ火属性しか使わないのか。

その考えがまず間違ってた。

三村は火属性しか使えないのだ。

あのジジイの言葉のおかげで考えようとしなかったが、少し考えれば出てきたはずの推論だ。

この世界において魔法を使うとき入力^{イン}は倉守になるらしい。つまり火属性しか使えない。

本来自分が自分の心の中に入る特訓だからジジイの話は一応間違つてはいない。

それに他人が入ってきたとしても、この特訓を行うのは氷河の一族のみで、しかもこんな特訓をする奴らは全属性を使えて当然。禁忌属性は扱うのが難しいので使おうともしないはずだから気づく切っ掛けが無かったのだらう。

俺は足払いを試みる。

いつもの倉守なら転ぶ。

そして俺の予想通りに三村は転んだ。

ここは倉守の心の中だ。

倉守の三村像であって、本物の三村では無い。

これは推論なのだが、三村が魔法使いとしてこの学校で有名なのは知っていたが、三村がどんな戦い方をしていたのかを知らなかったのでは無いのだろうか。

しかし知識として三村が魔法使いであることを知っている以上。魔法を使わないのはおかしい。

そこで自分の魔法使いとしての部分を強引に押し込んだと言っただけだ。

使える魔法は同じ。相手は三村の皮を被った倉守。負ける要素は無い。

俺は炎を爆発させて三村の足下を吹っ飛ばす。それを三村は転がってかわすが、

そんなのすで見えている。

柱を蹴り飛ばして三村の方へ倒す。俺は三村の逃げ道を塞ぐように回り込む。

それと同事に遅延魔法を炎属性に反応するようにセットする。

予想通りに三村は苦し紛れに柱を爆発させようとする。

遅延魔法は爆発に反応して、柱から三村に向かってまっすぐ炎を放射する。

三村は燃えさかる。

間髪入れずにぶん殴る。壁にまで飛ばす。さらに膝撃ちでトドメを刺す。

三村は崩壊する。グロテスクなスライムのように溶けていく。

さて、倉守をおぶって帰るか。

俺は倉守がいるべき祭壇の方を振り向く。

「前言撤回。中々楽しめそうじゃないか」

三村は倉守をお姫様だっこしながら俺を眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8195z/>

最強の俺と最弱の少女が魔法学園で同居生活（仮）

2012年1月12日20時57分発行